

北海道高等学校

「未来を切り拓く資質・能力を育む高校教育推進事業」

指 定 校 成 果 報 告 書

令和4年3月

北海道教育庁学校教育局高校教育課

まえがき

2030年の社会と子供たちの未来を見据え、平成30年3月に新しい高等学校学習指導要領が告示され、いよいよ令和4年度から年次進行で実施されます。

学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」を目指し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善や「カリキュラム・マネジメント」の確立を図っていくことが示されるとともに、より探究的な活動を重視するため、これまでの「総合的な学習の時間」から「総合的な探究の時間」に改訂され、教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成が求められています。

一方、令和元年度に始まった新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、学校の教育活動にも甚大な影響を及ぼしています。社会全体のデジタル化が推進される中、学校においてもICT環境を最大限に活用して学びの保障を進めることや、この事態に対応するためのカリキュラム・マネジメントを展開することが求められています。

こうした中、道教委では令和元年度より3年間、北海道高等学校「未来を切り拓く資質・能力を育む高校教育推進事業」を実施し、指定校を配置して「総合的な探究の時間」の改善・充実や、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を通じて資質・能力を育成する実践研究に取り組み、この度、各指定校による効果的な学習・指導方法の開発、優れた授業実践や校内研修などの在り方について、成果報告書として取りまとめることができました。

本道の全ての高等学校において、「総合的な探究の時間」などを中心に、各教科での学習を実社会での問題発見・解決にいかしていくための教科等横断的な教育を推進するとともに、カリキュラム・マネジメントの確立及び主体的・対話的で深い学びの実現に向け、本成果報告書が積極的に活用され、高校生がこれからの時代に求められる資質・能力を確実に身に付けることができるよう、期待しています。

結びに、本成果報告書の作成に当たり、御協力をいただいた研究指定校の皆様に、心から感謝申し上げます。

令和4年3月

北海道教育庁学校教育局高校教育課長

柴 田 亨

目 次

まえがき	1
○ 「総合的な探究の時間推進プロジェクト」プロジェクト研究事業 成果報告	
【札幌西陵高校】	3
【蘭越高校】	5
【伊達開来高校】	8
【大樹高校】	12
【芽室高校】	15
○ 「総合的な探究の時間推進プロジェクト」モデル校事業 成果報告	
【札幌南高校】	19
○ 北海道高等学校「学びの重点化」推進プロジェクト 成果報告	
【札幌北陵高校】	21
【苫小牧南高校】	27
【名寄高校】	31
【上士幌高校】	35
○ 参考資料	
・北海道高等学校「未来を切り拓く資質・能力を育む高校教育推進事業」 実施要綱	39
・北海道高等学校「未来を切り拓く資質・能力を育む高校教育推進事業」 概念図	46

「総合的な探究の時間推進プロジェクト」プロジェクト研究事業 成果報告書

北海道札幌西陵高等学校

1 事業実施前の状況及び課題

これまでの本校における「総合的な学習の時間」の実施計画は、学習指導（考査学習計画表作成等）、進路指導（面接指導、進路希望調査等）、生徒指導（薬物乱用防止教室、交通安全講話等）に関わる内容を取り扱っていた状況（図1）にあった。そのため、「総合的な探究の時間」の実施を迎え、3年間を見通した探究的な教育活動が乏しいことが最大の課題であった。

そこで、本校が育成したい生徒像等と照らし合わせて本校の目指す「総合的な探究の時間」の計画を立てる必要があった。具体的には、グランドデザイン、3年間の実施計画、年次毎の指導計画、毎時の授業計画案等を作成する必要があった。また、職員会議で「総合的な探究の時間」の実施への共通認識を図るための研修会や方向性の確認等も同時並行で進めなければならなかった。

図1 事業実施前の実施計画（4、5月）

月	日	曜	1年	担当	時間	2年	担当	時間	3年	担当	時間
4	10	火	基礎力診断テスト	教務部	3	基礎力診断テスト	教務部	3	基礎力診断テスト	教務部	3
	11	水	基礎力診断テスト	教務部	3	基礎力診断テスト	教務部	3	基礎力診断テスト	教務部	3
	12	木	着こなしセミナー	生徒指導部	1						
	12	木	サイバー教室	生徒指導部	1						
	19	木	進路志望調査	進路指導部	1	進路志望調査	進路指導部	1	進路オリエンテーション	進路指導部 学 年	1
	26	木	進路適性検査	進路指導部	2				進路志望調査	進路指導部	1
5	2	水							進路別ガイダンス	進路指導部 学 年	1
	17	木	安全の日	生徒指導部	2	安全の日	生徒指導部	2	安全の日	生徒指導部	2
	24	木	前期中間考査計画 作成	教務部 学 年	1	前期中間考査計画 作成	教務部 学 年	1	前期中間考査計画 作成	教務部 学 年	1

2 課題解決の方向性

「総合的な探究の時間」の実施に当たり、改善の方向性について学校全体で共通認識を図る。

3 事業の内容及び成果

(1) 実施体制

- ・本事業1年目は、校内準備委員会（任意8名）を立ち上げ、2年目以降は「総合的な探究の時間推進委員会」として校内の正式な組織として設置した。委員は、教務部長、進路指導部（1名）、各学年（2名）、教頭、任意（1名）の合計10名で構成した。
- ・年1回程度、北海道立教育研究所から助言等を得ながら改善を進めた。なお、北海道立教育研究所との打合せに、1・2年目は管理職と教務部長の2名が、3年目は1・2学年の「総合的な探究の時間」の学年チーフ（2名）が出席した。

(2) 取組及び成果

- ・校内準備委員会において、グランドデザイン、3年間の実施計画、1年次の授業の指導案、評価基準（ルーブリック）を作成した。北海道立教育研究所から参考資料の提供があり、業務の軽減を図りながら、評価の具体（エクセルシート）を作成した。

- ・「総合的な探究の時間」の実施に向けて共通認識を図るための研修会では、独立行政法人教職員支援機構の校内研修を職員全員で視聴し、全体研修を2回、職員会議を3回実施した。その結果、概ね教職員の理解を得るに至った。
- ・道内の先進校へ視察研修を実施し、先進校の取組を参考にして2学年で予定しているインターンシップの原案を作成するに至った。
- ・改善を図った「総合的な探究の時間」の実施により、より身近な課題を解決したいという生徒の自発的な欲求が喚起され、「北海道高等学校「未来を切り拓く資質・能力を育む高校教育推進事業」における生徒支援事業（次世代人材育成プロジェクト）」へ生徒の参加に結び付いた。

4 今後の課題と対応

- ・令和2年度入学生から本格的に実施する上で、1学年の生徒一人一人が探究のテーマを決めて活動する際に、ホームルーム担任とホームルーム副担任の2名で指導することが物理的に難しかったため、令和4年度入学生からは、学年を超えて担当する教員の数を増やす体制を検討する必要がある。
- ・今年度、コロナ禍のために当初予定していた2学年のインターンシップを行うことができなかったことから、オンライン等で企業研究を行う内容へ変更して実施した。事前の相談や連絡などのない状況で、生徒が自ら企業等へ連絡を取り、電話やZoomを駆使しICTを活用しながら報告書を作成した。PowerPointでの資料作成等は全体説明を1回実施しただけだったが、成果物は想定以上の出来映えであった。

その一方、図2に示したような新たな課題も見つかったことから、本事業における成果や課題をまとめた報告資料（文部科学省・北海道教育委員会研究指定事業等における成果発表交流会発表資料）を校内に提示し、課題を共有し、改善につなげるための会議を開催する予定である。

- ・また、探究のテーマ設定等、生徒の探究活動がより深められるような具体的な方策について、教員研修を継続的に実施する必要がある。
- ・各ホームルーム担任等担当教員への説明やコロナ禍における計画の見直し等、学年のチーフとなる教員に負担が集中している現状があり、本校の「総合的な探究の時間」が持続可能な活動となるためにも学校全体で分担した取組となるよう今後、体制の見直しを行う。
- ・本校の「総合的な探究の時間」の充実を目指して定期的な見直しを各学年で実施し、改善すべき点を洗い出しながら、推進委員会を中心に検討を重ね、向上させていきたい。

3. 今年度の成果と課題 (図2)

代替案での目標	今年度の成果	今年度の課題
望ましい職業観・勤労観の育成	班で話し合いながら、働くことや自分の進路について考えることできた。	生徒が主体的に学び、より深く探究できるような計画・構成の改善
インターネット検索のみ「調べ学習」からの脱却	インタビューを実施 社会と関わり、実体験を基に探究活動	インタビュー可能な企業のリスト化 調査目的に合った調査方法で探究する
ICT機器の効果的な利用の検討	Google Classroomの開設 「スライド」を用いた発表資料の共同作成	活用方法をどう指導する 情報共有を活発にするしかけ や計画の改善 スクラップボックス

5 問合せ先

学 校 名：北海道札幌西陵高等学校
 所 在 地：北海道札幌市西区平和3条4丁目2番1号
 電話番号：011-663-7121
 FAX番号：011-663-7122
 e-mail：sapporoseiryou-z0@hokkaido-c.ed.jp

「総合的な探究の時間推進プロジェクト」プロジェクト研究事業 成果報告書

北海道蘭越高等学校

1 事業実施前の状況及び課題

「総合的な学習の時間」の内容を踏襲し、1年生では「尻別川の調査」、2年生では「インターンシップ」、「見学旅行」、3年生では進路学習を中心とし、その他、単発的な学習が入り込む形で実施していた（図1）。課題としては、「総合的な探究の時間」の単元が構成されていないこと、系統的な計画となっていないことが挙げられ、探究課題を再設定し、年間指導計画を見直すとともに、各単元の学習内容を充実させることが必要であった。

図1 事業実施前の指導計画

	1学年 35時間	2学年 35時間	3学年 30時間 [総合的な学習の時間]
4月	オリエンテーション(1)	オリエンテーション(1)	模擬面接(2)
5月	クリーン作戦(2)	クリーン作戦(2) 地域の社会人との懇談会(2)	クリーン作戦(2) 地域の社会人との懇談会(2)
6月	上級学校説明会(2)	上級学校説明会(2)	上級学校説明会(2)
7月	上級学校見学(6)		企業・学校研究(2)
8月	地域学習(事前学習)(1)	インターンシップ調べ学習(3)	履歴書・エントリーシート(2)
9月	地域学習(調査見学)(4) 地域学習(事後学習)(2)	見学旅行調査学習(4) インターンシップ実習(6)	就職・進学試験対策(2)
10月	環境講演会(1) 近隣企業見学(6)	環境講演会(1) インターンシップ礼状(2)	環境講演会(1) 模擬議会オリエンテーション(1)
11月	特例校との交流(2)	見学旅行研修録作成(3)	模擬議会事前指導(6) 模擬議会リハーサル(3)
12月	職業学習(履歴書作成練習)(2)	模擬議会見学(3)	模擬議会本番(4) 模擬議会レポート作成(1)
1月	職業ガイダンス(3)	職業ガイダンス(3)	
2月	除雪奉仕(2)	除雪奉仕(2)	
3月	合格体験発表(1)	合格体験発表(1)	

2 課題解決の方向性

- ・地域学習を軸とし、3年間を見通した系統的な「年間指導計画」を作成する。
- ・探究の過程を盛り込んだ「単元指導計画」を作成する。

3 事業の内容及び成果

(1) 実施体制

「総合的な探究の時間」の年間計画等の作成は、教務部長・進路指導部長・各学年担任・教頭の6名で構成する「RS（蘭越高校総合的な探究の時間）委員会」が行い、各単元の準備や実施については、学年団を中心に行った。

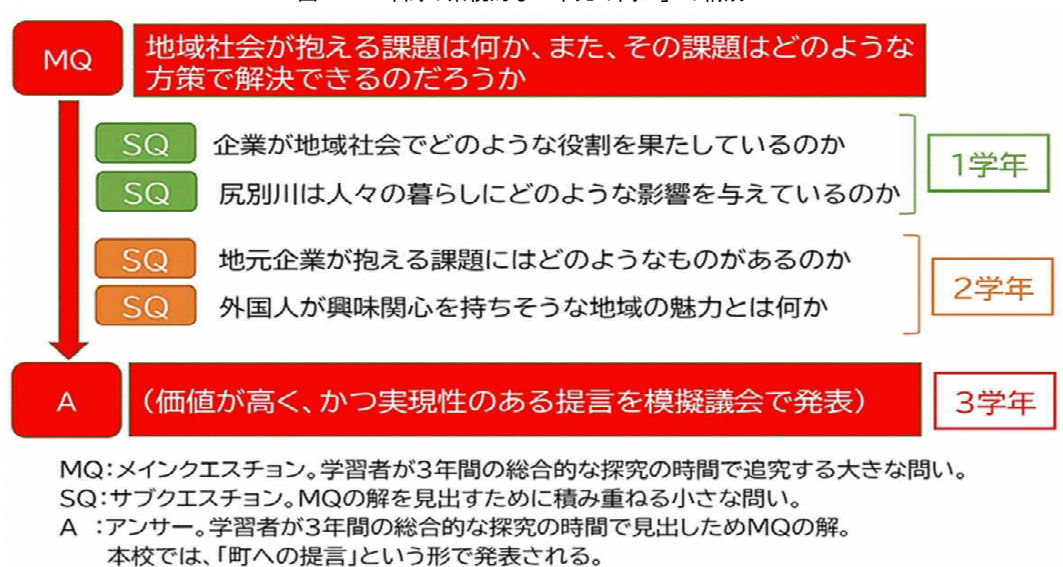
(2) 取組及び成果

① 年間指導計画の作成

年間指導計画の作成においては、3年間の探究課題として「地域（蘭越）」を軸とし、系統的なものとなることを重視した。3学年で地域課題の解決策を模擬議会の場で提言することをゴールと

して設定し、価値が高く、かつ実現性のある提言を行うために、1・2学年では、自然システム及び社会・経済システムから課題にアプローチし、多面的に地域の現状を捉えるアウトラインを作成した（図2）。

図2 3年間の系統的な「単元の問い」の構成



令和3年度の1学年からの実践であるため、成果が明らかになるのは令和5年度の提言内容を待つことになるが、「ゴール（価値が高く、かつ実現性のある提言を模擬議会で行うこと）」が明確に示されたことで、生徒が学習者の見通しを持てるようになるとともに、振り返りの視点を得たことにより主体的な学びの充実につながった。また、授業者間で指導内容が共有されたことで、これまで見られた学年ごとの指導の差異が解消されるとともに、学年ごとに計画を構想、立案する必要がなくなり、業務の負担が軽減した。



模擬議会一般質問



模擬議会終了後

② 単元指導計画の作成

単元指導計画の作成においては、学習過程を探究の過程とするため、全ての単元において、①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現、となることを重視した。また、授業者への意識付けとして、単元計画の中に「区分」という形で探究の過程を表記した（図3：赤枠）。

図3 単元指導計画

単元3:地域の自然環境と人々の暮らし

地域の自然環境(尻別川)をテーマに、グループによる探究活動を行う。テーマを通して、地域への理解を深めるとともに、探究活動の基礎を身に付ける。

UNIT	月	項目	区分	内容	時間
3-1	6	尻別川の基本知識	オリエンテーション	尻別川の地形や生息する生物、生活・産業への利用、歴史などについて学ぶ。	1
3-2	6	尻別川の課題を考える	課題設定	自然(水・生物)、治水(災害の歴史・治水事業)、利水(利水状況・スポーツ)の分野から選択する。グループごとに、課題を設定する。	2
3-3	7	尻別川と人々の暮らしを調べる	情報収集	インターネットや図書室等を活用し、テーマについて情報を集める。	3
3-4	7	フィールドワークに出かけよう	情報収集	関連する施設等を訪問して情報を集める。	3
3-5	9	身近な自然環境への理解を深めよう	情報収集	地域の自然環境の専門家の講演(環境講演会)を聞いて、理解を深めよう。	1
3-6	9	ポスターを作成しよう	整理・分析	ポスターセッションに向けて、図や説明に関する事項を整理し、ポスターを作成する。	5
3-7	10	発表会	まとめ・表現	ポスターを使い、グループ毎に発表する。地域連携特別校間(阿寒・蘭越)合同授業で発表。	2
3-8	2	除雪ボランティア	情報収集	除雪ボランティア活動を通して、自然環境と人々の生活への理解を深める。	2

単元5:地域の産業や文化を発信する

見学旅行(フィリピン)の学校間交流にて、地域の紹介を行うことを通して、地域の魅力の発見と異文化への理解を深める。

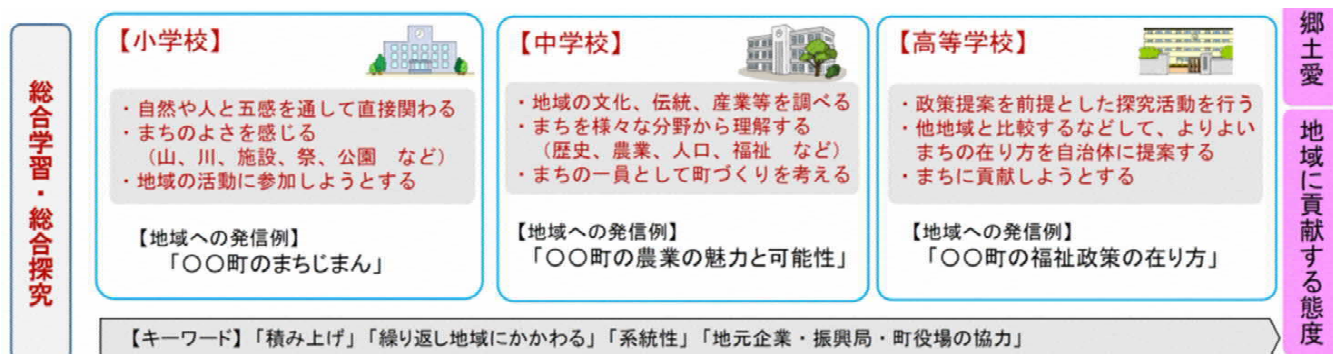
UNIT	月	項目	区分	内容	時間
5-1	4	国際交流をしよう	オリエンテーション	見学旅行時に行う学校間交流について説明を行い、今後の活動の概要を説明する。	1
5-2	5	地域の魅力とは	課題設定	外国人が興味関心を持ちそうな、地域の魅力とは何か。いくつかの候補をあげ、仮説を組み立てる。	2
5-3	9	環境講演会	情報収集	講演を通して、町のPRポイントを調べてみる。	1
5-4	10	PR資料を集める	情報収集	PR内容に関する情報を収集する。	3
5-5	10	町を紹介できるようにしよう	整理・分析	外国人にわかりやすく伝えるために、手段・内容などを整理する。	6
5-6	10	交流準備	まとめ・表現	現地での交流の準備・リハーサル。	1
5-7	10	フィリピンでの学校間交流	まとめ・表現	フィリピンの学校で交流の際に発表。	2

全ての単元で探究の過程が盛り込まれているため、探究の過程を繰り返すこととなり、学習者が探究の技法を確実に身に付けることができた。このことにより、3年生で高度な探究の技法を必要とする「地域課題の解決」の学習活動が充実し、作成する提言書の質が向上することが期待される。

4 今後の課題と対応

現在、蘭越町内で生まれ育つ全ての子どもたちに、郷土を愛し、地域に貢献する態度を身に付けさせるための「地域カリキュラム(図4)」を蘭越小学校及び蘭越中学校とともに検討している。小、中学校における「総合的な学習の時間」との円滑な接続により、地域を軸とした本校の「総合的な探究の時間」がより充実すると考え、積極的に意見交換を行っている。

図4 地域カリキュラムのイメージ



5 問合せ先

学 校 名 : 北海道蘭越高等学校
 所 在 地 : 北海道磯谷郡蘭越町蘭越町475-16
 電話番号 : 0136-57-5034
 FAX番号 : 0136-57-6234
 e-mail : rankoshi-z2@hokkaido-c.ed.jp

「総合的な探究の時間推進プロジェクト」プロジェクト研究事業 成果報告書

北海道伊達開来高等学校

1 事業実施前の状況及び課題

本校では、平成 30 年度の「総合的な学習の時間」において、探究型の学習として「シティズンシップ教育」を実施し、「総合的な探究の時間」の改善と充実に取り組んできた。しかし、実践内容は、探究的な体験活動にとどまり、その事前指導やまとめの活動では各教科が関わって実践できているが、3 年間の育成を目指す資質・能力を意識した計画的で教科等横断的な教育活動にはなっていないことが課題であった。

2 課題解決の方向性

(1) 指導計画と評価の改善

3 年間を見通した指導計画を立てるとともに、育成を目指す資質・能力を踏まえた評価の改善に取り組む。

(2) 地域の教育資源を活用した探究的な学習活動の充実

関係機関等と連携し、探究のプロセスに則った探究的な学習活動の充実に取り組む。

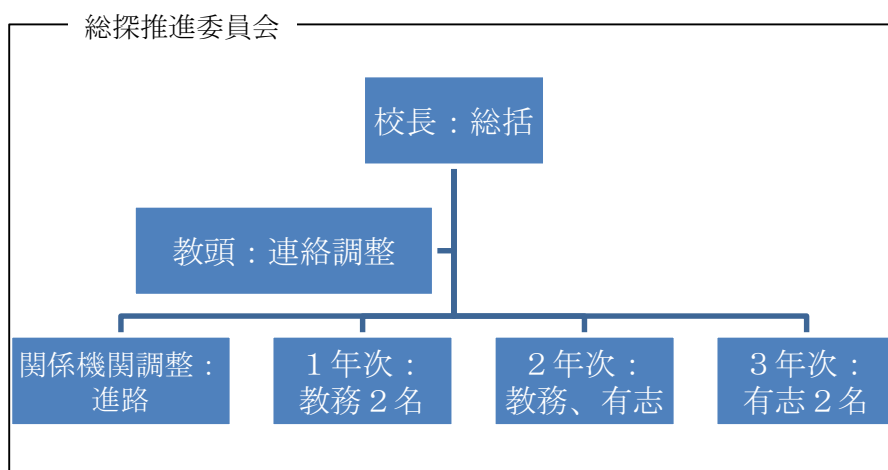
(3) 各教科における探究的な学習活動の充実

教科等横断的な視点から育成を目指す資質・能力を身に付けさせるため、全ての教科において探究的な学習活動の実践に取り組む。

3 事業の内容及び成果

(1) 実施体制

「総合的な探究の時間」については、教務部が各学年を担当していた。3 年間を見通した系統的な導計画を作成するため、プロジェクトチームとして、校長、教頭、進路指導部（1 名）、教務部（3 名）、有志（3 名）による「総探推進委員会」【図①】を編成して、指導計画等の改善に取り組んだ。

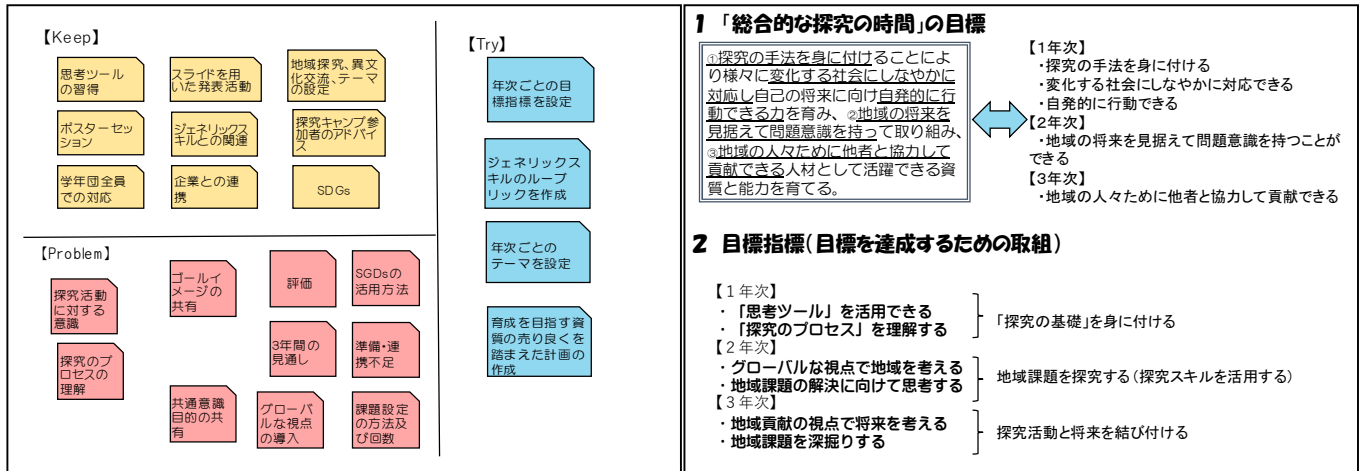


（図①：「総探推進委員会」の組織図）

(2) 取組及び成果

ア 指導計画と評価の改善

総探推進委員会において、「KPT法」を用いて「総合的な探究の時間」の現状の分析を行った【図②】。「KPT法」では、「ゴールイメージの共有」や「目的の共有」などが課題として出されたことから、「総合的な探究の時間」の目標を年次ごとの目標で整理するとともに、年次ごとの目標指標を設定した【図③】。



(図②:「KPT法」を用いた現状分析)

(図③:総合的な探究の時間の目標等)

「KPT法」の「TRY」において出された「ジェネリックスキル(※)に関するルーブリック」【図④】を作成して指導計画の作成に活用した。

また、「総合的な探究の時間」の指導と評価の改善に教員全体で組織的に取り組めるよう、校内研修会等【表①】を実施して教員の理解を深めた。

ジェネリックスキルに関するルーブリック								
育 成 を 目 指 す 資 質 ・ 能 力		主体的に学び、意欲的に新たな学びに取り組む力		多様性を尊重し、互いのよさを認めて協働する力		地域社会に貢献し、持続可能な未来を創造する力		
ジェネリックスキル		自己肯定力	表現力	思考力	傾聴力	調整力	創造力	分析力
		自己を理解して自信を持ち、他者を尊重することができる	考えをまとめ、他者にわかりやすく伝えることができる	課題の重点を認識し、解決方法を導き出すことができる	要点を把握し、共感して他者の話を聞くことができる	異なる考えをまとめ、物事を判断し行動することができる	既存概念にとらわれず、新しい物事を考えることができる	課題を明確にし、本質がわかるように整理することができる
評 価 尺 度	S	求めているレベルを越えて達成している	自分や他者の長所を的確に把握し、周囲と共感し協働して、責任ある言動をとることができる	伝え方を工夫して的確かつ論理的に説明することができる	課題を解決する方法を見出すことができる	話の要点を整理し、その内容を把握して、共感しながら相手の話を聞くことができる	価値観や意見の異なる人とも深い信頼関係を築き、立ち位置を考え協働することができる	経験のない状況や困難でも、既知の知識や技能を活用し、課題を解決することができる
	A	求めているレベルを十分に達成している	客観的に自分や他者の長所を理解し、物事に取り組むことができる	相手に対して伝えたい主旨を適切に説明することができる	課題の重点や根拠を認識することができる	相手の話の内容から、自分の考えとの同意点や相違点を理解して話を聞くことができる	価値観や意見の違いを理解し、その中で自分の考えを適切に伝え行動することができる	既知の知識や技能を活用し、新たな課題解決の方法を提案することができる
	B	求めているレベルを達成している	自分や他者の努力してきたことや改善を図ってきたことを確認することができる	相手に伝えたい内容を言語化して、わかりやすく伝えることができる	課題を整理することができる	相手の話の主旨を理解して聞くことができる	価値観や意見が自分とは異なる人の発言を冷静に受け止め、相手を尊重した対応ができる	既知の知識や技能を理解し、工夫や改善の方策を考えることができる
	C	求めているレベルをおおむね達成している	自分が取り組んできたことが、人の役に立っていることを感じることができる	相手に伝えたい内容を伝えることができる	疑問や課題を感じることができる	相手の話を静かに聞くことができる	自分と他の人との価値観や意見の違いを理解することができる	既知の知識や技能を用いて、状況を把握することができる

(図④:ジェネリックスキルに関するルーブリック)

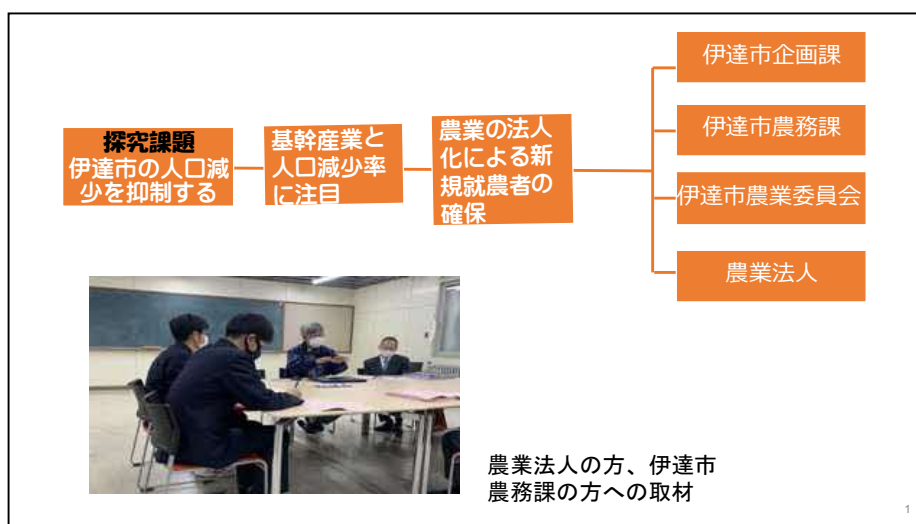
日付	内容等	備考
10月6日	○ 「探究キャンプ」参加者による中間発表 ○ 講演 総合的な探究の時間の充実に向けて 講師 國學院大學 田村 学 教授	令和3年度地域連携研修「研修会」
10月26日	○ 講義 探究活動の効果的な実施について ○ 演習Ⅰ「総合的な探究の時間」における仮説の検証 演習Ⅱ「課題と仮説の設定について」	道研からの講師派遣による研修

(表①：校内研修会等の概要)

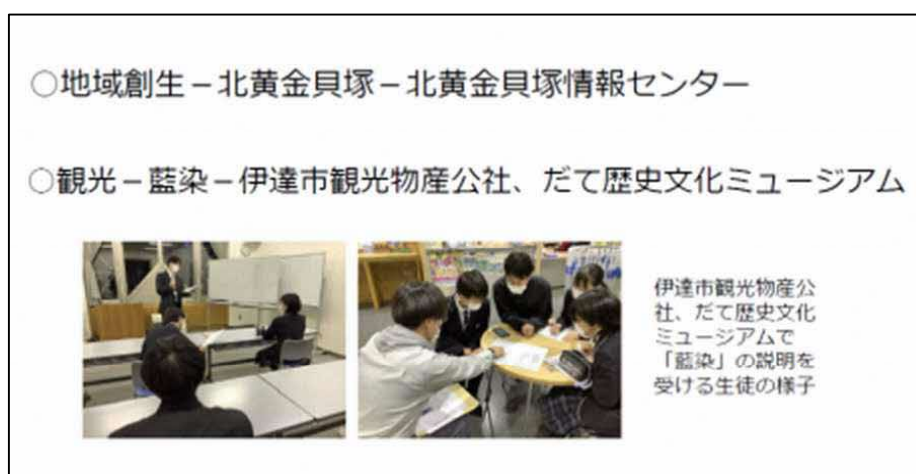
※ 本校では、全ての教育活動を通じて、7つのジェネリック・スキル（「自己肯定力」、「表現力」、「思考力」、「傾聴力」、「調整力」、「創造力」、「分析力」）を身に付けさせることとしている。

イ 地域の教育資源を活用した探究的な学習活動の充実

1、2年次各クラスの代表生徒2名（計16名）が、道教委主催の「探究活動キャンプ」に参加した。生徒は5つのグループに別れ、「地域創生」や「地域課題の解決」をテーマに探究活動に取り組んだ【図⑤、⑥】。活動の中で、地域を巡検したり、地域の関係機関と連携したりすることで、地域への理解を深めていた。また、参加した生徒は、他の生徒が探究学習をする際のロールモデルとなった。



(図⑤：人口減少抑制に向けて関係機関と連携)



(図⑥：地域資源を活用した地域創生)

ウ 各教科における探究的な学習活動の充実

各教科・科目等においても、地域の人的・物的資源を活用するなどして、探究的な学習活動を実践する機会が増えてきた。この結果、育成を目指す資質・能力に基づいた教科間の連携が実践された。

例えば、家庭科・家庭総合（２年生）の単元「食生活」において、食生活をSDGsの視点で考え、地産地消等について学習した成果を、学校外における学修として実施した「長期インターンシップ『伊達開来高校サンタ食堂』プロジェクト（※）」につなげるなど、教科や「総合的な探究の時間」で身に付けた資質・能力を関連付けた取組を行った。

※ 関係機関と連携して、地域の特産物について、生産から加工、流通、販売まで一体的に学んだ上で、「クリスマス・ランチ」を開発

4 今後の課題と対応

地域の教育資源を活用した探究学習を円滑に進めるためには、地域の関係機関との連携がより一層必要になることから、コンソーシアムを構築するなどして、連携体制を強化する。また、学習評価については、「総合的な探究の時間」の特質を踏まえ、妥当性や信頼性を高めるため、組織的・計画的に取り組む。

5 問合せ先

学 校 名：北海道伊達開来高等学校 所 在 地：北海道伊達市竹原町44番地 電話番号：0142-23-2525 FAX番号：0142-23-2526 e-mail：date-kaiki-jimu@hokkaido-c.ed.jp
--

「総合的な探究の時間推進プロジェクト」プロジェクト研究事業 成果報告書

北海道大樹高等学校

1 事業実施前の状況及び課題

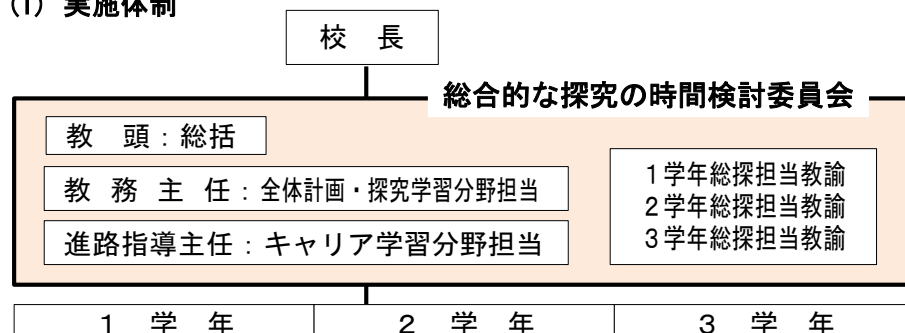
本校では、生徒自身が課題意識をもち、主体的に課題を設定することが課題となっていた。これまで、「読む力・書く力」、「表現力」、「共生する力」を、育成を目指す具体的な資質・能力として再設定し、地域との連携強化及び横断的な学びの推進による学習内容の改善を行ってきた。一方、評価方法については改善が進んでいなかったため、今年度、「総合的な探究の時間」の具体的な評価方法を確立し、学校全体の共通理解を図ることとした。

2 課題解決の方向性

- ・学習活動の評価の観点及び基準を示すルーブリックを作成すること、また、教師と生徒及び保護者と共有すること。
- ・北海道立教育研究所による「生徒指導要録に対応したエクセルファイル」を基に、大樹高校版評価ファイルを作成し、生徒指導要録への記載に係る教師の労力の軽減につなげること。

3 事業の内容及び成果

(1) 実施体制



【委員会の役割】

- ① 年間指導計画の作成
3年間を見通した単元構成（「総合的な探究の時間」のアウトライン）を立案・決定する。
- ② 外部機関との連絡調整
学校と「総合的な探究の時間」における地域の教育資源（町役場、町内企業等）を結び付ける。
- ③ 評価分析
生徒の学習状況を分析し、単元の学習内容を修正する。

(2) 取組及び成果

① ルーブリックを用いた評価について

「総合的な探究の時間」における評価について、評価の時期や場面及び評価材料を設定した上で、評価基準を明確にするため、ルーブリック（図1）を作成した。

1 学年「インターンシップ」では、本校が育成を目指す3つの資質・能力のうち「読む力・書く力（知識・技能）」、「表現力（思考・判断・表現）」を、それぞれ「実習のしおり（報告書）」と「プレゼンテーション（発表会）」で評価した。単元の冒頭にルーブリックを生徒に示したことで、生徒は、活動全般においてA基準を意識して取り組むことができ、ほぼ全ての生徒がB以上の評価を得ることができた。教師は、ルーブリックを用いた事前の打合せで

図1 ルーブリック（1 学年インターンシップ）

1 学年「インターンシップ」において重点的に指導と評価を行う資質・能力		
	読む力・書く力 (知識・技能)	表現力 (思考・判断・表現)
A	課題の解決に向けた自らの考えを、適切な表現を用いて書いてまとめている。	学んだことや自分の考えを、他の生徒に対して、分かりやすく伝えている。
B	課題の解決に向けた自らの考えを書いてまとめている。	学んだことや自分の考えを、他の生徒に伝えている。
C	課題を設定した上で、自らの活動内容について書いている。	学んだことについて他の生徒に伝えている。

目線合わせを行ったため、教師間で差異のない評価をすることができた。

② 生徒指導要録に対応したエクセルファイル（大樹高校版）について

「生徒指導要録に対応したエクセルファイル」を活用して、大樹高校版評価ファイルを作成することで、生徒指導要録への記載に係る教師の負担が軽減された。また、生徒へのフィードバックとして、個票（図5）を生徒に返却した際に、生徒同士で評価について比較をしたり議論をしたりする姿が見られた。このように自発的に取組を振り返ることや、A評価の具体例を知ることによって、今後の学び方を考えるきっかけとなった。

【エクセルファイルの使用方法】

（ア）基本情報を入力する（図3）

該当の欄に活動内容、学習内容及び設定した資質・能力と評価の観点を入力する。（図2：太枠）

（イ）各生徒の評価を入力する（図4）

教師がルーブリックに基づき評価し、評価欄にA、B、Cで入力する。

（ウ）評価文が自動生成される（図5）

（ア）、（イ）を行うと、自動的に評価文が生成されるので、生成された評価文を生徒指導要録にコピーする。また、生徒別の個票（図5）も作成される。

図2 エクセルファイル 生徒別個票

3 年 1 組 01 番 氏名 道研 太郎	
○ 総合的な探究の時間の個人評価	
資質・能力	評価
読む力・書く力（知識・技能）	A
表現力（思考・判断・表現）	B
○ 総合的な探究の時間の記録	
・ 学習活動	
インターンシップ	
・ 学習方法	
報告書の作成 プレゼンテーション	
・ 観点	
読む力・書く力（知識・技能） 表現力（思考・判断・表現）	
・ 評価	
課題の解決に向けた自らの考えを、適切な表現を用いて書いてまとめた。また、学んだことや自分の考えを、他の生徒に伝えていた。	

図3 エクセルファイル 基本情報の入力

① 基本情報の入力				
A	B	C	D	E
北海道大樹高等学校		第1学年	総合的な探究の時間	
I 活動内容				
1 インターンシップ				
II 学習内容				
1 報告書の作成				
2 プレゼンテーション				
III 評価基準				
資質・能力		A	B	C
読む力・書く力（知識・技能）		3	2	1
表現力（思考・判断・表現）		3	2	1

図4 エクセルファイル 各生徒の評価入力

② 各生徒の評価入力	
1 年 1 組 1 番 氏名 道研 太郎	
○ 総合的な探究の時間の個人評価	
資質・能力	評価
読む力・書く力（知識・技能）	A
表現力（思考・判断・表現）	B
○ 評価場面及び評価材料	
「読む力・書く力」： 実習のしおり（報告書）	
「表現力」： プレゼンテーション（発表会）	

図5 エクセルファイル 評価文の自動生成

③ 評価文の自動生成			
評価レベル	3	2	1
読む力・書く力（知識・技能）	課題の解決に向けた自らの考えを、適切な表現を用いて書いてまとめている。	課題の解決に向けた自らの考えを、適切な表現を用いて書いてまとめている。	課題を設定した上で、自らの活動内容について書いていた。
表現力（思考・判断・表現）	学んだことや自分の考えを、他の生徒に対して、分かりやすく伝えていた。	学んだことや自分の考えを、他の生徒に伝えていた。	学んだことについて他の生徒に伝えていた。

（例）課題の解決に向けた自らの考えを、適切な表現を用いて書いてまとめることができた。また、学んだことや自分の考えを、他の生徒に伝えていた。

設定した評価基準の文章を組み合わせ、自動的に表現される。

指導要録への貼り付け

4 今後の課題と対応

- (1) 今年度の1学年における取組を踏まえ、次年度は全学年で系統的に「総合的な探究の時間」の評価を実施する。
- (2) 生徒が自分の探究の過程を振り返り、次の学習に向かうことができるようにするため、学習活動後に、ルーブリックを用いた生徒同士の相互評価を実施する。
- (3) 教師が生徒の学習状況を的確に捉えて指導の改善を図ることで、生徒の取り組む探究の質をより高められるよう、指導と評価の計画について継続的に改善を行う。
- (4) 大樹高校版評価ファイルの次年度からの本格運用に向けて、評価欄については3観点を設定して記入されるよう、システムを改善する必要がある。

5 問合せ先

学 校 名：北海道大樹高等学校
 所 在 地：北海道広尾郡大樹町緑町1番地
 電話番号：01558-6-2063
 FAX番号：01558-6-2868
 e-mail：taiki.daihyo@hokkaido-c.ed.jp

参考資料

資料1 事前学習ワークシート（課題設定）

インターンシップ 課題設定シート

1年 A組 番 氏名()

① 理想 仕事をする上で、ありたい自分像は？

イメージする職業： 役場の人

・積極的にはたらく人になりたい。
 ・地域の人々の役に立ちたい。

(例) 多くの人のために書く作品を生み出せる作家になりたい！

③ 問題 今の自分に足りないものは？

・自分がやらなくてはならないという気持ち。
 ・周りを見て学ぶこと。
 ・イメージする職業について知っていることが少ない。

(例) 書き用具一式、読書体と行書体の基本の定書、練習時間の確保、作品を世の中に発表する行動力。

GAP

② 現実 今の自分はどんな感じ？

・人まかせにしている。
 ・言いかたに指示をこれとなく。
 ・誰か役場に立ててほしい。
 ・役場での仕事をしているのが具体的にわかっていない。

(例) 読書体は得意だが、行書体は書き方が分からない部分がある。作品を披露したことがない。

④ 課題 理想と現実の差を埋めるために考えるべきこと

・自分のことば(口頭・文字)を明らかに相手に伝えるように。
 ・交際相手にもっとも進めよう(どうしたらいいか)。
 ・誰かの役に立てよう(にするためにはどんなことをしたらいいか)。
 ・役場でどんなことをしているのかを知る。

(例) 練習する時間を確保するためにはどうしたらいいか。作品を世の中に発表するための方法。

→ 周りを見て、自分のできることを積極的に知ろうとする。

インターンシップの単位において、探究のプロセスを実現するために、事前指導で「課題設定」を行いました。①～③を踏まえて設定された④がリサーチ・クエスチョンにあたります。

インターンシップでは、リサーチ・クエスチョンの解(アンサー(答え))に必要な情報収集を行うこととしています。

資料2 生徒説明用ルーブリック

・ルーブリック		
	読む・書く力	表現力
A	自分が設定した課題に対する解決策を、正しい日本語と表現で書いている。	自分の考えなどについて、分かりやすくスライドにまとめた上で、他の生徒に対し、表現(言葉・目線・間など)を工夫して伝えている。
B	自分が設定した課題に対する解決策を書いている。	自分の考えなどについて、分かりやすくスライドにまとめた上で、他の生徒に伝えている。
C	自分が設定した課題に対する解決策を書いていない。	自分の考えなどについて、分かりやすくスライドにまとめていない、または他の生徒に伝えていない。
評価方法	実習日誌	作成したスライドと発表の様子

単元の導入段階で生徒に評価基準を提示しました。学校で設定したルーブリックを、生徒に伝わりやすいように表記しています。

生徒と教員とが目線を合わせることで、双方が見通しを持ち、スムーズに学習を進めることができました。

1 事業実施前の状況及び課題

本校では、事業実施前の「総合的な探究の時間」は、各学年主導で企画・実施している状態であり、3年間の系統的な指導になっていなかった。また、年間指導計画の整備が不十分で、キャリア学習など様々な学習内容が混在している状態の年間指導計画であったため、学校教育目標や育成を目指す資質・能力との関係で、学習内容を整理し、単元として再構成する必要があった。さらに、地域の教育資源を活用した探究学習の実現が不十分であったため、本プロジェクトを活用し、地域の教育資源を活用した探究学習を実現させていく必要があった。

2 課題解決の方向性

- ・3年間の系統的な指導に向け、単元計画の作成・充実を図る。
- ・カリキュラム・マネジメントの視点から単元配列表を作成し、「総合的な探究の時間」を中心に育成を目指す資質・能力を明確化する。

図1 3年間の系統的な指導へ



3 事業の内容及び成果

(1) 実施体制

「総探委員会」（教務主任、進路主任、各学年から1名の計5名）が組織されていたものの、実効的な組織となっておらず、実際には、学年主任が中心となって計画・実施している現状であった。本事業についても、現2学年主任が中心となって、3年間の系統的な指導に向けて取組を整理した。現1学年は、昨年度の1学年の成果を引き継ぎ、改善させていくなど、徐々に組織体制の充実を図った。

(2) 取組及び成果

① 「総合的な探究の時間」の単元計画の作成・充実

1学年は、「地域を知る」をテーマに、地域資源を活用し、地元企業との連携を図り、フィールドスタディを行った。事前学習では「地元や企業を見つめ、イノベーションを知る」をテーマとして外部講師による講演を行った。フィールドスタディの場所は、十勝管内企業（30社程度）から生徒の希望で選択することとした。フィールドスタディ後は、「地元十勝の問題点や課題に気づき、理想の地元・地域を実現するための「新結合」を考える」を目的として事後学習を丁寧に行った。

「新結合」とは、課題解決を意味し、「新結合」のアイデアを出すことができれば、新しく生み出されたものがどのように地域の活性化に結び付くのか、職業としてどのように関連付けられるのか、今の学びとどのように結び付くのか、どんな学びが必要となるのかという観点から振り返り、生徒自身の次の課題へと結び付くように工夫した。成果発表会には、フィールドスタディ先の企業の方を招いて実施した。「新結合」のアイデアなど、生徒たちの発表は、企業の方にも好評で、

企業の方から評価を受けることで生徒の意欲の向上が見られた。また、生徒の情報収集力や分析力の向上を図ることができ、生徒が探究課題を自己理解や職業理解へとつなげ、深く考える様子も見られた。全てゼロから新しいことを行うのではなく、既にある取組を「総合的な探究の時間」の視点から捉え直し、改善していくことで、学校として単元の中で育成したい資質・能力を踏まえ、学校主導で外部資源を活用することができた。

2 学年は、「北海道未来創造プロジェクト」という単元を設定し、単元計画の

作成・充実を図った。2 学年のテーマである「日本を知る」ということについて、見学旅行先と北海道とのSDGs 実現に向けた取組の比較を通して、自ら「問い」を見いだし、未来の北海道を創造する探究を行うこととした。単元の最初に、事前学習として、RESAS（地域経済分析システム）という地域経済に関する様々なビッグデータを地図やグラフで分かりやすく可視化したシステムについて学び、分析の仕方や論理的な思考の仕方を学ぶという取組を行った。また、北海道の現状と課題について調査・分析を

図 2 見学旅行に係る単元計画

	時期	時間	形態	内容
0	7 月	1~3	授業	国語の授業で RESAS を活用し、意見文を書く (RESAS の使い方の使い方、分析の仕方を学ぶ)
1	7 月	1~2	講話	SDGs を知ろう (概要、道の取り組みなど)
2	7~8 月	1~2	授業 個人	事前レポート作成 (各クラスの分野 (SDGs の 17 の目標) の観点から北海道の現状・課題について調査・分析をする)
		夏休みの課題	個人	
3	8~9 月	3~4	授業 班毎	研修内容の決定 (班を作り、各自テーマを持ち寄り、班のテーマを決める。 どこで何を見てくるのかを決める。)
4	10 月下旬	見 学 旅 行		
5	11 月	2~3	授業	クラス発表の準備
	11 月	1	授業	クラス発表
	11 月中旬	1	全体	全体発表

を行い、レポートにまとめた。レポートでは、仮説を立て、データを活用し、確かな根拠に基づき、考察・分析・検証を繰り返すことや、論理的に説明すること、そのアイディアを実現した際の地域の相乗効果などを考察させるよう工夫した。見学旅行中、生徒は、プラスチックではなく紙のストローが使用されていることやバイオマス材料を使用したゴミ袋が使用されていることに着目するなど、SDGs を踏まえた探究において、新たな視点を獲得したり、視野を広げたりすることができていた。

1 年次に「地域を知る」ことから、情報収集力・分析力を育むことを目指し、探究課題を自己理解・職業理解と設定してきた土台の上に、2 年次はフィールドを日本へと広げ、データ分析力、論理的思考力、課題解決能力を育むことを目標にして、SDGs の視点から探究活動に取り組んだことにより、現代社会の諸課題への関心が高まり、他県と北海道との比較分析から主体的に課題を見付けることなどを通じて、生徒の論理的な思考力を育むことができた。また、成果発表会等を通じて、表現力、コミュニケーション能力を身に付けることができた。生徒が主体的に学ぶ課題探究型の見学旅行とすることができた。

② 単元配列表の作成

教務部が中心となり、カリキュラム・マネジメントの視点から単元配列表を作成する過程において、本校における育成を目指す資質・能力を「総合的な探究の時間」を中心として、各教員の担当する教科での授業にコンピテンシーとしてどのように落とし込むことができるかという視点が各教員に醸成された。また、育成を目指す資質・能力について、教員の理解が深まり、考察の必要性が意識されるようになった。

4 今後の課題と対応

現2学年が中心となって3年間の系統的な指導内容となりつつある「総合的な探究の時間」の取組の成果を引き継ぎ、学年主導から「総探委員会」等を中心とした、より組織的な体制としていくことが今後の課題である。そのために、カリキュラム・マネジメントの視点から、育成を目指す資質・能力を「総合的な探究の時間」を中心に育成していけるよう、今後は単元配列表の改善等を図る予定である。

5 問合せ先

学 校 名：北海道芽室高等学校 所 在 地：北海道河西郡芽室町めむろ1条北1丁目6番地 電話番号：0155-62-2624 FAX番号：0155-62-2624 e-mail：memuro-jimu@hokkaido-c.ed.jp
--

【単元配列表（2学年）】

【第2学年】「総合的な探究の時間」実施に関わる各教科・科目との関連事項														教務部
探究課題 社会との関わりがある課題を自ら設定し、主体的にその情報収集に努め、整理・分析を協働して行う。他者と協力し課題に対する合意を形成し、多様な価値観をもつ集団の中で、的確に表現する力を養う。														
育てたい能力 【書】：書く力 【読】：読む力 【調】：調査をする 【問】：問い（仮説）を立て、推理、判断する 【考】：考える力 【発】：発表をする 【資】：資料作成をする														
教科名	科目名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
国語	現代文B	【読】ミロのピナース	【書】詩	【読】豊かさをつながり	【読】山椒魚	【読】山椒魚	【読】山椒魚	【読】山椒魚	【書】短歌	【読】生命情報・社会情報・機械情報	【読】世界は、いま	【読】こころ	【読】こころ	
	古典B	【読】蛇足	【読】十訓抄	【読】頼朝の妻	【読】徒然草	【書】文法練習	【書】文法練習	【書】史記	【書】文法練習	【書】馬のはなむけ	【書】文法練習	【読】塞翁が馬	【調】文学史	
	世界史A	【考】ユーラシアの諸文明	【考】世界の一体化	【考】アジアの繁栄	【考】19世紀の世界	【考】19世紀の世界	【考】二つの世界大戦	【考】二つの世界大戦	【考】二つの世界大戦	【考】二つの世界大戦	【考】第二次世界大戦後の世界	【考】現代の社会	【考】古典常識	
地理歴史	日本史B(選b)													
	地理B(選b)	【考】東南アジア	【考】南アジア	【考】西アジア	【考】アフリカ	【考】ヨーロッパ	【考】ヨーロッパ	【考】アンソロアメリカ	【考】ラテンアメリカ	【考】オセアニア	【考】地形	【考】地形・気候	【考】気候	
	数学Ⅱ	【考】式と証明	【考】複素数と方程式	【考】点と直線・円	【考】軌跡と領域	【考】指数関数	【考】対数関数	【考】加法定理	【考】加法定理応用	【考】微分係数・接線	【考】極大・極小	【考】積分法	【考】積分法	
数学	数学B(選a)	【考】等差数列	【考】等比数列	【考】シグマ計算	【考】漸化式	【考】数学的帰納法	【考】ベクトル	【考】位置ベクトル	【考】ベクトル方程式	【考】空間・ケル	【考】座標空間	【考】空間・ケル	【考】空間・ケル	
	物理(選b)	【考】物体にはたらく力	【考】円運動と万有引力	【考】運動量と力積	【考】気体の状態変化	【考】波の性質	【考】音	【考】光	【考】電場と電位	【考】電流	【考】電流と電場	【考】電磁誘導	【考】電磁波	
	化学基礎	【考】物質の探究	【考】物質の構成粒子	【考】イオン結合	【考】金属結合	【考】結晶の分類	【考】物質量	【考】化学反応式	【考】酸と塩基	【考】中和反応	【考】酸化と還元	【考】酸化還元反応式	【考】電池と電気分解	
保健体育	生物(選b)	【考】物質と細胞	【考】タンパク質	【考】遺伝	【考】呼吸	【考】光合成	【考】植物の発生	【考】植物の発生	【考】神経	【考】効果器	【考】動物の行動	【考】植物ホルモン	【考】生物の系統	
	体育	【考】集団行動	【考】染色体	【考】選択①	【考】選択②	【考】選択③	【考】選択④	【考】選択⑤	【考】選択⑥	【考】選択⑦	【考】選択⑧	【考】選択⑨	【考】選択⑩	
	保健	【考】体ほくし	【考】新体カテスト①	【考】選択①	【考】結婚生活	【考】医薬品	【考】医療サービス	【考】保健サービス	【考】環境問題	【考】ゴミ処理	【考】食品の安全	【考】働くこと	【考】体育理論	
英語	英語表現Ⅱ	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	【考】過去完了形	【考】過去完了形	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	【考】形式目的語	【考】進行形の受け身	【考】未来完了形	
	英語表現Ⅱ	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	【考】過去完了形	【考】過去完了形	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	
	英語表現Ⅱ	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	【考】過去完了形	【考】過去完了形	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	【考】関係代名詞	
家庭	家庭基礎	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	
	家庭基礎	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	
	家庭基礎	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	【考】基礎知識	
商業	情報処理(選a)	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	
	情報処理(選a)	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	
	情報処理(選a)	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	【考】タイピングの基本	
簿記(選b)	簿記(選b)	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	
	簿記(選b)	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	
	簿記(選b)	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	【考】簿記の要素	

「総合的な探究の時間推進プロジェクト」モデル校事業 成果報告書

北海道札幌南高等学校

1 事業実施前の状況及び課題

2030年以降の社会を見据え、急速に変化する社会において、将来リーダーとして社会で活躍し貢献することができるよう、自ら探究し学び、幅広く教養を身に付ける態度を育むことが肝要である。

そのため、本校の生徒には「総合的な探究の時間」等において、課題研究など探究的な学習活動により、主体的・対話的で深い学びを実現し、知識及び技能、思考力、判断力、表現力等、学びに向かう力、人間性等を育成するために、言語能力、問題発見・解決能力、情報活用能力、協働性等を育むことが必要である。

2 課題解決の方向性

- ・多様な言語的スキルの習得等を通して、探究基礎力を身に付けるため、学問研究、新聞学習、ディベート等の取組を行う。
- ・探究実践力を高めるため、他者と協働しながら、自ら設定したテーマでの課題研究に取り組み、主体的・対話的で深い学びを実現する。

3 事業の内容及び成果

(1) 実施体制

名称「総合的な探究の時間推進委員会」

構成員 教務部（1名）、進路部（1名）、図書情報部（1名）、実施各学年代表（3名）、副校長、
教頭 ※委員長は互選

(2) 取組及び成果

〔1学年〕多様な言語的スキルの習得を通して、探究基礎力を身に付ける。

・学問研究

興味・関心を持った学問・研究について調べ、その内容と魅力を他者に分かりやすく伝える。クラス内や他のクラスの生徒の前で発表した後は、振り返りシートを活用し、自己評価を行うとともに、自己の在り方生き方について考える。

・新聞学習

興味・関心を持った新聞記事・話題について、複数紙の読み比べを行った上でグループ内で交流し、内容の理解を深める。また、自らの意見を盛り込んだコラムを作成する。

・ディベート

一つの論題を与え、肯定側と否定側のチームに分かれ、一般聴衆であるジャッジを説得する。ジャッジがより説得力があると判断したチームが勝ちとなる。

【成果】

1学年の学問研究、新聞学習、クリティカルシンキング、ディベートを通して、自分の考えをまとめ、表現する力が身に付くとともに、社会の中でどう生きるか、自己の在り方生き方について考えさせることができた。また、次年度実施する探究学習に向けての下地づくりができた。

[2 学年] 様々なテーマに関する課題研究を通して、探究実践力を高める。

- ・ 平和学習

見学旅行で長崎を訪問することを機に夏季休業中に「平和」をテーマにレポートを作成し、そのレポートを生徒同士で共有し、レポートから学んだことから更に「問い」を設定し、探究活動を実施した。

- ・ 課題研究

探究したい題材・テーマをグループ単位で考え、テーマ設定後は計画書の作成、探究、考察と進める。一連の過程・考察等をまとめ、3 学年のポスターセッションでの発表につなげる。

【成果】

2 学年の平和学習、課題研究を通して、主体的に課題を発見し取り組む力や、他者と協働し対話によって問題解決を図る力が身に付いた。

4 今後の課題と対応

- ・ GIGA スクール構想のスタートを見据え、問題発見・解決能力、情報活用能力を育成するためにも、タブレット端末等を「総合的な探究の時間」をはじめとする授業時だけではなく、学校生活の様々な場面における活用を検討する必要がある。
- ・ タブレット端末等について、生徒が所有する機器の利用も含め (BYOD)、生徒の活動の自由度が高い「総合的な探究の時間」での更なる活用が重要であり、生徒の柔軟な発想やアイデアを丁寧に拾いながら、活用の幅を広げていく必要がある。
- ・ コロナ禍において、協働性等を育む上で ICT を活用する場面が増えている。ICT を活用し、探究の過程で生徒同士の情報共有や協働的な学習を促すとともに、情報検索や情報集約、情報活用、さらには情報を発信する力を身に付け、探究活動に取り組む主体性や学習意欲、学習効果の向上をより一層図る必要がある。

5 問合せ先

学 校 名：北海道札幌南高等学校 所 在 地：北海道札幌市中央区南18条西6丁目1－1 電話番号：011－521－2311 FAX番号：011－521－2316 e-mail：sapporominami-z0@hokkaido-c.ed.jp

北海道高等学校「学びの重点化」推進プロジェクト 成果報告書

北海道札幌北陵高等学校

1 事業実施前の状況及び課題

本校は、生徒の8割が大学への進学を希望し、おおむね2割から3割の生徒が国公立大学へ進学するという進路状況である。そのため、学校全体の傾向として学力を測る指標が「知識・理解」に偏ってしまい、授業も知識伝達を主とした一方通行型の授業が中心となっていた。

一部の教員は、自分の授業に協同的な学びを取り入れるなど、生徒自身が考えて活動する場面を設けるなどの工夫をしていた。しかし、それが学校全体の取組になっているとは言えず、授業改善の輪を広げる必要があった。また、学校教育目標改正時に「9つの育成を目指す資質・能力」を設定したが、学校として育成を目指す資質・能力をどのように伸ばすのかが見えていない状態であった。

これらの状況から、授業をはじめとする全ての教育の活動において育成を目指す資質・能力をいかに伸ばし、生徒が主体的に活動する場面をいかに増やすかが課題となっていた。

2 研究テーマ及び研究の重点

- ・教科横断的に資質・能力を育成する視点からの授業改善体制の構築
- ・資質・能力育成の観点からの授業改善における ICT の活用

3 事業の内容及び成果

(1) 実施体制

①令和2年度…「カリキュラム＝マネジメント委員会」及び「G:Com」の担当者

- * カリキュラム＝マネジメント委員会（令和2年度で廃止）
 - ・本校におけるカリキュラム＝マネジメントサイクルを確立するために設置した委員会
 - ・副校長、教頭、主幹教諭、教務主任、進路指導主事、各学年主任の8名
- * G:Com（学習コーディネーター会議）
 - ・中長期における学力向上プランを立て、教科間の調整を行うために設置した委員会
 - ・国語、地歴・公民、数学、理科、外国語の5教科から各1名担当者を選出

②令和3年度…副校長、教頭、主幹教諭、教務主任、「G:Com」の担当者

(2) 取組及び成果

①教科等横断的に資質・能力を向上させる「自分を、ひらけ。プロジェクト」

- ・全ての教科・科目の授業、「総合的な探究の時間」、特別活動を通して資質・能力を育成し、3年間を通して総合的に生徒の資質・能力を育成する構想を立案する。
- ・本校で設定した育成を目指す9つの資質・能力を踏まえ、生徒が主体的に活動をする場面を増やす呼びかけを行うなど、教科等横断的な視点からの授業改善に取り組んだ。
- ・校内研修の実施 講 師：村川 雅弘氏（甲南女子大学教授）
テーマ：資質・能力育成の視点からの授業スキーム作り

②道外視察研修の実施と成果の共有（主幹教諭、教務主任）

- ・岡山県立笠岡高等学校、岡山県立操山高等学校…学校を上げた資質・能力の育成と「総合的な探究の時間」

- ・長崎県立南山高等学校…ICT の活用

③育成を目指す資質・能力のルーブリック作成【資料Ⅰ】

- ・育成を目指す資質・能力について、S-A-B-C 基準からなるルーブリックを作成することで、到達目標を可視化し、生徒と教員で共有した。
 - ・ルーブリックの作成においては、ICE モデル※のルーブリックを参照し、全ての語尾を統一した。
 - ・ルーブリックは各学年において、学期ごとに目標を立てる際と振り返りを行う際に活用する。
- (※ Ideas (基礎知識)、Connections (つながり)、Extensions (応用) の3段階を活用した学習評価モデル)

④「全教科で育む骨太の学力」の育成【資料Ⅱ】

- ・教科等横断的に本校で設定した9つの資質・能力の育成をより確実なものにするため、各教科で重点的に育成する資質・能力の選定するとともに標語を作成し、可視化した。
- ・各教科担任は、各教科で選定した重点的に育成する資質・能力を、どの授業場面でも構わないので、育成するよう授業の工夫・改善を行った。
- ・教科で重点的に育成する資質・能力を選定することで、教科担任が授業改善に取り組みやすいようにした。(どの単元で、どのような手段を使い、どの資質・能力を育成するかは教科担任に委ねた。)
- ・「総合的な探究の時間」における探究活動を、「全教科で育む骨太の学力」を育成する根幹に据えた。これは、教科等横断的に資質・能力の育成を図る視点から授業改善に取り組むことで、各教科・科目の授業において探究的な学びが推進されるとともに、各教科・科目の授業を通して身に付けた資質・能力を「総合的な探究の時間」における探究活動で統合することをねらいとしたものである。(各教科・科目の授業と「総合的な探究の時間」における探究活動が往還による相乗効果を想定している。(学びの方法、非認知スキル等))

⑤各教科の年間研究テーマの設定【資料Ⅲ】

- ・「全教科で育む骨太の学力」に基づいた、各教科の年間研究テーマを設定し、公開授業期間の授業や教科内研修に反映させた。

⑥研究授業の実施

- ・各教科で育成を目指す資質・能力の視点から、「授業づくり」をテーマに研究授業を実施した。
世界史…資質・能力の育成に軸足を置いた授業(発信力・傾聴力・課題発見力・創造性)
資質・能力を向上させる目的で、ジグソー法による資料の読み解きと思考を行った。
英語…資質・能力の育成のために ICT を活用した授業(発信力・傾聴力・社会性・創造性)
活動を支えるツールとして、Jamboard や Padlet などのアプリを活用した。
- ・成果報告会として研究授業及び研究協議を実施した。

⑦教科内研修の実施

- ・教科内において、資質・能力を育成する授業の在り方や ICT の活用などを適宜検討、情報共有を行った。

4 今後の課題と対応

(1) 課題

- ・各教員の授業の改善状況の把握と、情報の共有
授業改善の責任は教科担任にあるため、取組を効果的に共有することが必要である。
- ・生徒の学びの変容を測る手段の確立
資質・能力の成長を可視化する手段が必要である。

- ・探究活動の一層の充実

生徒の探究のプロセスを改善し、探究の質や成果の向上につなげることが必要である。

(2) 対応

- ・授業アンケートや互見授業、教科内での意見交換など教科単位での取組の充実

資質・能力の育成をもとに、授業について意見交換し、互いに高めあう機会を増加させる。

- ・生徒自身が学びを振り返る手法の確立と機会の増加

生徒が自分の学びを振り返る機会を増やし、学びのプロセスをポートフォリオ等で記録する。

- ・探究活動の指導力の向上

教員研修により、探究活動の指導の在り方について理解を深める。

5 問合せ先

学 校 名：北海道札幌北陵高等学校 所 在 地：北海道札幌市北区屯田 7 条 8 丁目 電話番号：0 1 1－7 7 2－3 0 5 1 FAX番号：0 1 1－7 7 2－3 0 5 2 e-mail：sapporohokuryou-z0@hokkaido-c.ed.jp

学校教育 目標	資質能力	身に付ける力	Grade S (Extensions) 習慣にした	Grade A (Connections) 出来た	Grade B (Ideas) 分かった	Grade C (Not gains) 身につかなかった
自己を開く	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力	自分の考えとの共通点、相違点を整理しながら相手の意見を聴く <u>習慣を身に付けた</u> 。	相手の意見を聴きながら要点を整理することが <u>出来た</u> 。	相手の意見を注意深く聴くことの大切さが <u>分かった</u> 。	まだ左のどれにも該当しない。
	発信力	自分の意見を分かりやすく伝える力	根拠を持ち論理的に話すことで、自分の意見を相手に分かりやすく伝える <u>習慣を身に付けた</u> 。	自分の意見の要点を整理して相手に分かりやすく伝えることが <u>出来た</u> 。	自分の意見を分かりやすく相手に伝えることの大切さが <u>分かった</u> 。	まだ左のどれにも該当しない。
知を啓く	協働力	相互にお互いの不足を補い合い、ともに協力する力	常に自分の長所を生かして人と協力し、物事にあたる <u>習慣を身に付けた</u> 。	お互いに自分の長所で相手の不足を補い合い、協力することが <u>出来た</u> 。	互いに不足を補い合っで、協力することの大切さが <u>分かった</u> 。	まだ左のどれにも該当しない。
	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	物事に取り組み際に、自分の現状を正しく把握し、目的や課題を明らかにする <u>習慣を身に付けた</u> 。	物事に取り組み際に、目的や課題を明らかにして取り組むことが <u>出来た</u> 。	どうすれば自分の目的や課題を明らかにすることが出来るのか <u>分かった</u> 。	まだ左のどれにも該当しない。
未来を拓く	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	見つけた課題の解決のため、効果的な計画を立てて準備する <u>習慣を身に付けた</u> 。	見つけた課題の解決のために自分なりに計画を立てて解決しようとする事が <u>出来た</u> 。	どのような計画を立てれば見つけた課題解決につながるのか <u>分かった</u> 。	まだ左のどれにも該当しない。
	実行力	目的を設定し確実に行動する力	何事にも目的意識を持ち、そのための行動をとる <u>習慣を身に付けた</u> 。	目的を持って他者に指示されずに、自ら行動しようとする事が <u>出来た</u> 。	目的を持つことで確実に行動することが出来るということが <u>分かった</u> 。	まだ左のどれにも該当しない。
未来を拓く	主体性	物事に進んで取り組む力	行動を起こす際に、自分の意志で判断し、前向きに取り組む <u>習慣を身に付けた</u> 。	自分の意志で、自分で判断して物事に取り組むことが <u>出来た</u> 。	実際の経験を通して、物事に進んで取り組むことが出来るものか <u>分かった</u> 。	まだ左のどれにも該当しない。
	社会性	考えや行動を周囲に受け入れられるように表現できる力	常に、望ましい態度を取り周囲の理解を得られるよう行動する <u>習慣を身に付けた</u> 。	どうすれば、自分の考えや行動が周りの人に受け入れられるかを頭において行動することが <u>出来た</u> 。	どうすれば自分の考えや行動を、周りの人に分かってもらえるかを <u>分かった</u> 。	まだ左のどれにも該当しない。
未来を拓く	創造性	新しい価値を生み出す力	見たことのない課題に対して、常に新しい価値を生み出すことで、自分の解を出そうとする <u>習慣を身に付けた</u> 。	答えのない課題に対し、新しい価値を生み出すことにより、自分なりの解決を見出すことが <u>出来た</u> 。	既存の知識や概念を組み合わせたことで、新しい価値を生み出せることを実感として <u>分かった</u> 。	まだ左のどれにも該当しない。
	知識・技能	それぞれ教科・科目で身に付ける知識や技能	基礎的な知識を組み合わせた応用(いわゆる模試・センター・共通テストに記述レベル)	基礎的な知識や概念の理解を定めて覚えた。(いわゆる定期調査・小テストレベル)	基礎的な知識や概念の理解を定めて覚えた。(いわゆる定期調査・小テストレベル)	基礎的な知識や概念の理解を定めて覚えた。(いわゆる定期調査・小テストレベル)

2020.12.03 G:COM

未来を拓く
北陵高等学校のstyle

全教科で育む骨太の学力 9つの汎用的資質・能力の育成を目指して

希望進路をかなえられる学校

卒業後に次のステージで活躍するための力を身につけられる学校

知識を啓く

資格ではなく力

自分を、ひらけ。
プロジェクト

汎用的な9つの資質・能力を高め、骨太の学力を

①傾聴力

②発信力

③協働力

④課題発見力

⑤計画力

⑥実行力

⑦主体性

⑧社会性

⑨創造性

変わず続けて行くこと

- ①学校体制としての学習スタイルづくり
- ②1年次の家庭学習習慣を身に付けさせる取り組み
- ③2年7月模試までに国数英をUP

これまでの北陵高校

- ・ごく普通の普通科高校として特筆すべき物がない中で、一定の評価を維持できているのは、出口指導・進路実績による。
- ・入学時の進路希望では、概ね毎年80%程度の生徒が国公立大学を志望している。実際に合格しているのはおおむね全体の30%程度の生徒である。より第一志望をかなえられる学校へ。
- ・国公立大学への合格は一般入試によるものが大多数であり、推薦入試の合格率は低い。
- ・生徒の進路希望は多様化傾向にあり、明確な目標を持って専門学校を希望する生徒も増加しつつある。
- ・その反面、やりたい学問や進路先が未定のため、「勉強したくないから」「成績が悪いから」「3科目の方が楽」など、ネガティブな理由で専門学校や私立大学を選択する生徒もいる。これらの生徒にも積極的な進路選択で上を目指させることで、前向きに進路選択できる生徒をより一層増やしたい。

自己を開く

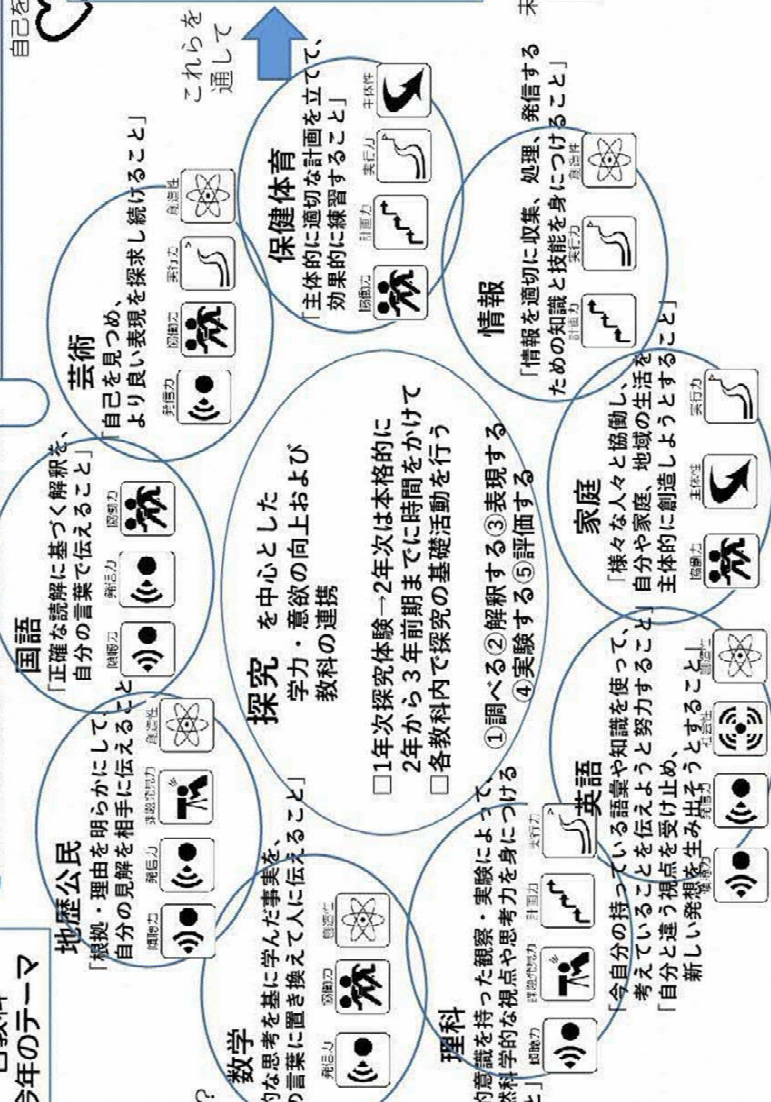


- ・共通テスト全般への骨太の対応
 - 教科毎の細かい対応の前
 - に生徒のベースアアップ
 - ・学校推薦型・総合型選抜でも勝負できる生徒の育成へ
 - 3年次に本格始動する時のスタート位置の底上げにつながる
 - ・大学でゼミの中心となって活躍する生徒に
 - 専門学校・就職先でも主体的に活躍する人材へ
- 社会で輝く力の涵養の一歩目

未来を拓く



今後、入試改革がどうなったとしても、変化に対応できる学校体制を確立しておくことで、乗り切っていける！



各教科の年間研修テーマ

令和3年度、北陵高校の全体研修テーマ「学び方を学ぶ授業」に対する、各教科の研修テーマが以下の通り出そろいました。今年度はこの研修テーマに沿って、個人及び教科内での授業研究を進めてください。

授業をよりよいものにしていくために、北陵高校教職員一丸となって研修を深めて行きましょう。

1. 北陵高校全体の年間研修テーマ

学び方を学ぶ授業

2. 各教科の年間研修テーマ

教科	研修テーマ	研究授業
国語	読み方を学ぶ（文章の構造を意識し、語彙を増やす）	
地歴公民	根拠・理由を明らかにして自分の見解を相手に伝える授業	前期： 先生 後期： 先生
数学	暗記型学習からの脱却 考えを言語化させる授業作り	先生
理科	目的意識を持った観察・実験によって、 自然科学へのアプローチを学ぶ	未定
外国語	大学入学共通テストやその他長文に対し、 早く正確に読み取るかの指導と学習方法研究	（ 先生 先生）
保健体育	コロナかにおける感染対策を行った上で、 最大限充実した教育活動を目指す	
芸術	視野を広げ、多様な文化を受け入れようとする姿勢を 身に付ける授業	教科内の見学が可能であれば、だれでも可
家庭	主体的・対話的で深い学びに繋がる グループワークの在り方	
情報	プログラミングの授業実施に向けて	

3. 令和3年度 研修アドバイザー希望教科

地歴公民科、外国語科

北海道高等学校「学びの重点化」推進プロジェクト 成果報告書

北海道苫小牧南高等学校

1 事業実施前の状況及び課題

苫小牧市を含む胆振東学区は、国公立・私立を合わせると学校数が多く、また、石狩管内・札幌市の学校へも通学圏であることから、中学生が進学先として選択できる学校が多い地域である。本校は、令和2年度（2020年度）入学者選抜において、出願者の倍率が1.0倍を下回る結果となり、この事態を学校存続の危機と捉え、教職員から有志を募り、学校改革推進委員会（「苫小牧南アクションプラン」～通称MAP）を設立した。まず、外部から見た本校の実態を確認するため、生徒、保護者及び地域への大規模アンケートを実施した。その結果、学習指導、進路指導及び生徒指導等の幅広い分野において、問題点が浮き彫りになった。

特に学習指導における問題点として、板書と説明を中心とした指導方法や知識・技能の習得に偏った指導方法が上げられ、授業改善が急務であることを全教職員で合意形成した。この課題を解決するため、生徒の興味・関心を引き出す授業、「主体的・対話的で深い学び」による思考力・判断力・表現力を育成する授業及びICT機器を有効的に活用する授業への転換が必要と認識し、令和2年度より、北海道教育委員会のサポートを得て、授業改革の推進に取り組み、学校魅力化を進めようと、本プロジェクト研究指定校への応募に至った。

2 研究テーマ及び研究の重点

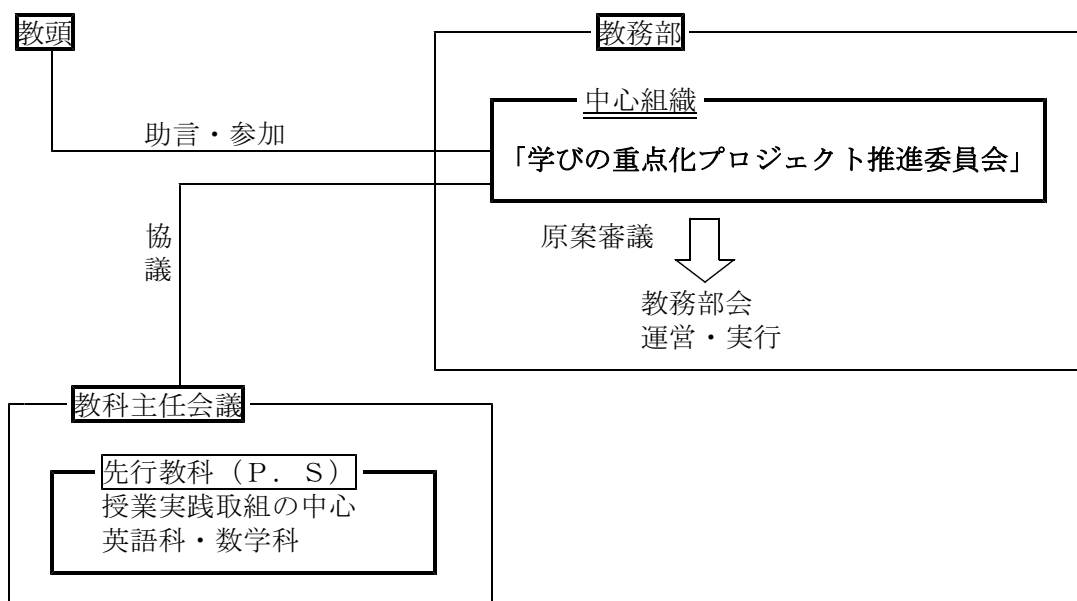
授業内容の軽重や構成の工夫等により、「学びの重点化」を図り、創出した時間を生徒の「主体的・対話的で深い学び」に活用し、「思考力・判断力・表現力」を育成する教育活動を充実させる。その際、ICT機器や観点別学習状況の評価の効果的な活用について、実践及び検証を行う。

3 事業の内容及び成果

(1) 実施体制

教務部内に、中心組織として「学びの重点化プロジェクト推進委員会」を設置し、全体の計画立案及び進行管理を行った。

「学びの重点化プロジェクト推進委員会」と各教科との協議の上、授業実践を行った。特に、英語科・数学科を先行教科（preceding subject＝P.S）と位置付け、特に研究授業での実践を通して、他教科を牽引する役目を果たした。



(2) 取組及び成果

ア 先進校視察（令和2年10月22日実施）

- ・視察校 北海道札幌北高等学校、北海道札幌国際情報高等学校
- ・派遣者 教職員2名（英語科・数学科各1名）
- ・内 容 授業見学、授業改善に関する取組状況についての実践紹介
- ・成 果 ICT機器及び「主体的・対話的で深い学び」の手法の導入に関し、具体的なイメージを得るとともに、学校全体での授業改善の取り組み方について大きな示唆となった。

イ 中学校訪問（令和3年10月実施）

- ・視察校 苫小牧市立啓明中学校（10月19日）
苫小牧市立苫小牧東中学校（10月28日）
- ・派遣者 教職員4名（各中学校2名）
- ・内 容 ICT機器を活用した授業の見学、授業改革に向けた学校としての取組の進め方や観点別学習状況の評価の在り方についての実践紹介
- ・成 果 中学校では、ICT端末を日常的に活用しており、持続可能な授業の在り方を具体的にイメージすることができた。また、ICT機器を活用した授業展開には、教室全員で視覚的に情報を共有できるモニターなどの視聴覚機器が重要であることを再認識し、観点別学習状況の評価の具体的な方法も学ぶことができた。授業改革の推進のためには、研修会や通信等で情報発信するなど改革を先導する分掌等の役割が重要であることを確認した。

ウ 校内研修会

(7) 令和3年7月16日実施

- ・講 師 胆振教育局教育支援課高等学校教育指導班主査 佐藤 光洋氏
- ・研修題 「観点別学習状況の評価について」
- ・内 容 観点別学習状況の評価並びに「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善についての講演と質疑応答
- ・成 果 観点別学習状況の評価の成立の背景と意義、具体的な実施のイメージを共有することができた。

(4) 令和3年9月6日実施

- ・形 式 教職員によるグループディスカッション
- ・研修題 「本校生徒に身に付けさせたい力『苫南力（仮）』とは何か。」
- ・内 容 各教科での議論を受け、本校教育課程や観点別学習状況の評価の基礎となる本校生徒に身に付けさせたい力を教職員で協議した。
- ・成 果 各教職員の意見を共有することにより、『苫南力（仮）』設定の基盤がつくられた（9月職員会議で決定）。

エ 指導主事訪問

教科指導訪問と関連させ、各教科で研究授業と協議を実施し、授業改善におけるきっかけ作りとした。特に、令和3年度は先行教科として、英語科及び数学科で複数回実施し、教科指導力の向上を図った。

(7) 令和2年度

- ・11月19日 家庭科（教科指導訪問として実施）
留萌教育局高等学校教育指導班指導主事 高井 央氏
- ・12月23日 地歴公民科
胆振教育局高等学校教育指導班指導主事 楠本 学氏
- ・12月24日 理科
胆振教育局高等学校教育指導班主査 福田 敦氏

(4) 令和3年度

- ・7月20日及び10月26日 英語科・数学科
英 語 科 胆振教育局高等学校教育指導班主査 佐藤 光洋氏
数 学 科 檜山教育局高等学校教育指導班指導主事 三上 真未氏
- ・11月2日 英語科・体育科（教科指導訪問として実施）
英 語 科 胆振教育局高等学校教育指導班主査 佐藤 光洋氏

保健体育科 渡島教育局高等学校教育指導班指導主事 久保田哲也氏

・11月11日 数学科・理科（教科指導訪問として実施）

数 学 科 檜山教育局高等学校教育指導班指導主事 三上 真未氏

理 科 胆振教育局高等学校教育指導班指導主事 岡島 礼久氏

オ 授業公開旬間

・内 容 教職員による授業公開及び参観

・成 果 本校では初めての試みであり、身近な教職員から授業に生かせる様々な手法及び気付きを得ることができた。また、授業改善について、教職員間で意見交換がしやすい職場の雰囲気がつくられた。

・期 間 令和2年12月7日～12月24日

令和3年6月21日～7月2日

令和3年11月1日～11月12日

カ 管内研究協議会の実施

(ア) 令和2年度（11月5日）

・講 師 学校教育局高校教育課高校教育指導係主査 岩渕 啓介氏

・助言者 胆振教育局教育支援課高等学校教育指導班主査 福田 敦氏

・参加者 39名（他校からの参加者3名）

・内 容 「学びの重点化による効果的な学習指導について～新学習指導要領を踏まえた主体的・対話的で深い学びの在り方」と題した岩渕氏の講演を軸に意見交換

・成 果 新学習指導要領に即した授業づくりの基本的な考え方や、具体的な手法について研修を深めた。また、持続可能な取組が重要であることを知り、協議会終了直後から、講演内容を取り入れた授業を実践する教職員もいた。



【講師による講話の様子】



【研修を受ける教員の様子】

(イ) 令和3年度（11月16日）

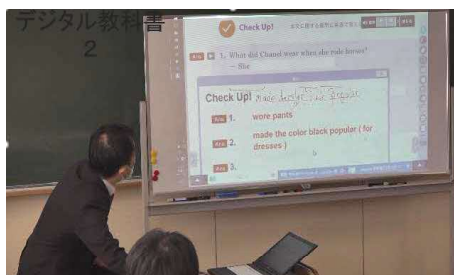
・助言者 英語科 胆振教育局高等学校教育指導班主査 佐藤 光洋氏

数学科 檜山教育局高等学校教育指導班指導主事 三上 真未氏

・参加者 27名（他校からの参加者12名）

・内 容 英語科及び数学科でそれぞれ開催した。録画した映像による授業公開及び研究発表、ICT機器の活用方法や観点別学習状況の評価に関するグループ協議や情報交換を行った。

・成 果 授業公開に向けての取組の中で本校の授業改善に向けた取組を実践することができた。また、参加した教職員からは様々な知見を得ることができ、ICT機器の活用方法や観点別学習状況の評価に関する他校の実践を知り、情報共有を図ることができた。



【デジタル教科書を使用した授業（英語）】



【「GoogleForm」を用いたアンケートの様子（数学）】



【研究発表の様子（英語部会）】



【協議の様子（英語部会）】



【協議の様子（数学部会）】

4 今後の課題と対応

(1) 「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業構築について

各教科において、様々な実践が行われているが、学校全体の取組として深めていく必要があることから、ICT機器の活用や観点別学習状況の評価の導入をきっかけとして、授業改善を一層推進する。また、研修会や授業公開週間、異校種への訪問等による研修を継続する。

(2) ICT機器操作への習熟

令和4年度よりBYODによる1人1台端末が導入されるが、教職員一人一人のICT機器を活用する力に相当な差があることから、ICT機器の活用に関する研修会や教職員がICT機器を使用しなければならない場面を設定し、学校全体のICT機器を活用する力を伸ばしていく。

(3) 観点別評価本格的導入に向けての準備

本校生徒に身に付けさせたい力＝『苦南力（仮）』7つの力、各科目のシラバスは作成した。今後、学校としての統一した評価の方法や内規の整備、生徒への評価基準や評価方法の提示（単元シラバス）について、準備を進める。

5 問合せ先

学校名	： 北海道苫小牧南高等学校
所在地	： 苫小牧市のぞみ町2丁目1番2号
電話番号	： 0144-67-2123
FAX番号	： 0144-67-2124
e-mail	： tomakomaiminami-z0@hokkaido-c.ed.jp

北海道高等学校「学びの重点化」推進プロジェクト 成果報告書

北海道名寄高等学校

1 事業実施前の状況及び課題

本校の生徒は素直で真面目であるが、勉強は「暗記すること」と考える傾向にあり、思考する習慣が身に付いていない。そのため、本校の教育目標及び目指す生徒像の実現を見据えた効果的な学習指導等の研究に取り組み、自ら学び、自ら考え判断し、自ら行動できる自立した生徒の育成を目指すこととし、実現に向けて一貫した教育活動を学校全体で実践する体制を確立する必要があった。

○目指す生徒像

自ら学び、自ら考え判断し、自ら行動できる自立した生徒

育成を目指す資質・能力（学習指導要領第1章総則第1款3）

- ・知識及び技能が修得されるようにすること
- ・思考力、判断力、表現力等を育成すること
- ・学びに向かう力、人間性等を涵養すること

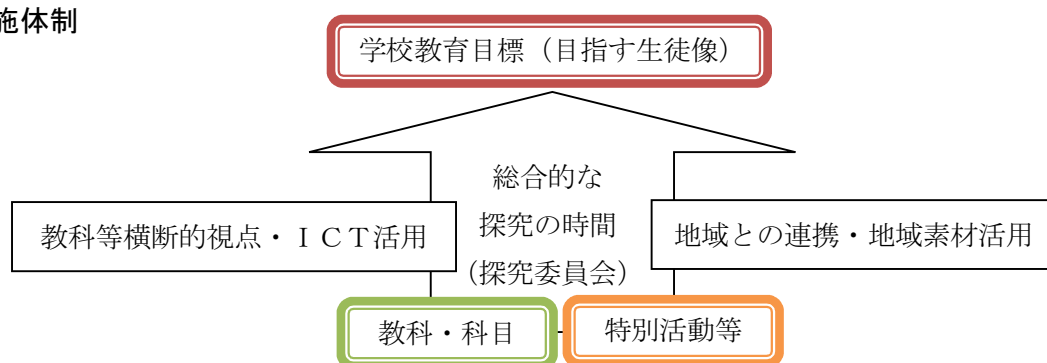
課題 ⇒ 育成の強化

2 研究テーマ及び研究重点

研究テーマ		研究重点
A	カリキュラム・マネジメントを確立し、学習内容のまとめ方及びICT等の活用の工夫を図る「学びの重点化」	カリキュラム・マネジメントにより、各教科等において年間学習指導計画や単元の指導と評価の計画の見直しを図るとともに、次の①、②により、主体的・対話的で深い学びを実現する学習指導について研究する。 ① 単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、学習内容のまとめ方を工夫する。 ② ICTを活用して教材・教具やワークシート等を工夫し、教える場面と考えさせる場面を関連付けながら適切に学習内容を組み立てる。
B	発展的な学習を重視した「探究的思考ツールの開発」及び「学びの重点化」	学習内容のまとめ方や指導の順序、重点の置き方及び取扱の軽重等を工夫し、知識及び技能の活用を図る発展的な学習指導について研究する。 「学びの重点化」で創出した時間を、生徒の主体的・対話的な学びに活用し、思考力・判断力・表現力等を育成する。

3 事業の内容及び成果

(1) 実施体制



「総合的な探究の時間」と各教科・科目や特別活動等とを関連付けて「主体的・対話的で深い学び」を推進し、自ら考え、主体的に行動できる生徒を育成する。

また、ICTの活用と教科等横断的視点に立った授業改善、地域と連携し地域素材を活用した学びを推進していく。

(2) 取組及び成果

ア 教科等横断的な視点に立った授業改善

イ 名高探究スキルの活用

主体的・対話的で深い学びの実現に向け、各教科・科目等の指導内容について、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通し、そのまとめ方や重点の置き方に工夫を加えながら、効果的に指導できるようにする必要がある。そのため、学習指導要領解説の中で示されている考えるための技法を可視化し、汎用的スキル「名高探究スキル」として様々な場面で活用した。

【名高探究スキル（アイコン）】

多面的・多角的に見る	比較する	分類する	順序づける	理由づける
見通す	具体化する	抽象化する	関連づける	構造化する

イ 教科・科目の単元配列表の作成

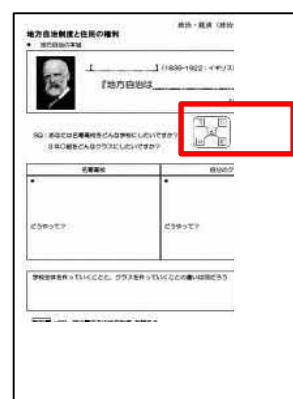
自ら学び、自ら考え判断し、自ら行動できる自立した生徒を3年間で育成すべく、「名高探究スキル」を用いた教科・科目の単元配列表を作成し、教科等横断が可能である活動の可視化や関連付け・統合等の整理を行い、学校全体で効果的な学習活動に取り組んだ。

「名高探究スキル」の活用は、探究活動だけではなく、各教科・科目の学習においても必要なスキルであることから、1年次の早い段階において各教科から説明することとした。また、各授業の活動においては、生徒が思考する際の方向性として、「名高探究スキル」の

アイコンを示し、協働的・対話的な学習活動に繋げた。



地歴公民科による「名高探究スキル（分類する・理由づける）」活動の様子



「名高探究スキル」の教科での活用
(アイコンにより、考察する方向性を示す)

(ウ) ICTの活用

各科目での授業において、生徒のスキル習得に向けて主体的で意欲的な活動となるよう、配付プリントにQRコードを添付し、「名高探究スキル」と連動することで個別最適化した学習の一助とした。



QRコードとタブレットを用いた学習

イ 総合的な探究の時間の工夫

(ア) 第1学年「総合的な探究の時間」『探究之行Ⅰ』

1学年の「総合的な探究の時間」については名高ラボと称し、探究活動を通して課題解決に向けた意欲を高めることができるよう、大学のゼミ（研究室）方式の一部を取り入れ、課題設定の仕方や探究の方法、分析の仕方を身に付ける『探究之行Ⅰ』とした。学年末に各ゼミの成果発表を実施する。



大学教員による探究活動への
アドバイス風景

【個人の探究テーマ（抜粋）】

偉大な作曲家の自筆譜からみえてくるもの	整数～数学の女王～
名寄高校駅の開業に向けて	将来は都会に住みたい？田舎に住みたい？
日本人とは何ぞや	野菜嫌いを直し、食生活を改善
金属イオンの検出の方法	ひとり暮らしをするなら
迫力ある美しい写真を撮るために	命の質について考える
令和以降に残していかなければならないものは何か？	仮説検定に挑戦！
お金と幸せの関係性	テスト効果って本当に効果出る？
未来を考える	折り鶴いろいろ

(イ) 第2・3学年「総合的な探究の時間」『探究之行Ⅱ』

第2学年から第3学年前期については、各学年の発達段階に応じて設定した目指す資質・能力の育成に向け、『探究之行Ⅰ』や授業等で身に付けた「名高探究スキル」を活用したグループによる探究活動（『探究之行Ⅱ』）を行うこととした。テーマについては、名寄

名寄市の高校の
入学者数を増加させるには？

10 札幌経済大学 企画委員会 事務局



北海道高等学校「学びの重点化」推進プロジェクト 成果報告書

北海道上士幌高等学校

1 事業実施前の状況及び課題

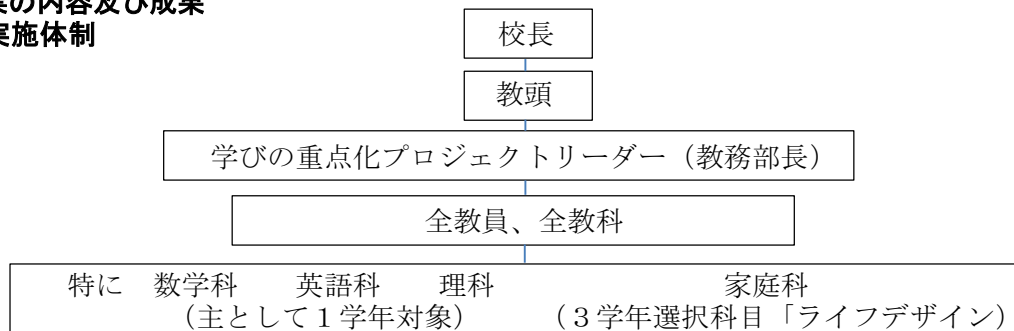
本校は普通科2間口、全校生徒134名の小規模校であり、地元の上士幌町以外に、周辺の帯広市や音更町などの隣接する地域から通学する生徒が全体の約8割を占めている。生徒の学力の定着度に差があり、基礎学力の定着や学習意欲の向上、家庭学習の習慣化などに課題がある。また、学校生活に対して消極的な姿勢の生徒が多く、積極的に行動できる生徒の育成を図る必要があった。

2 研究テーマ及び研究の重点

①カリキュラム・マネジメントを確立し、学習内容のまとめ方及びICT等の活用の工夫を図る「学びの重点化」、②基礎的、基本的な学習を重視した「学びの重点化」の研究テーマに基づき、「思考力・判断力・表現力に重点をおいた授業づくり」を研究の重点とし、数学科・英語科・理科・家庭科を重点4教科と位置付け、取組を推進した。

3 事業の内容及び成果

(1) 実施体制



(2) 取組及び成果

ア 全教科での取組

- ① 本校の学校教育目標である「未来を切り拓く人間性豊かな人を育てる」と本校の育成を目指す資質・能力である「自分の将来のために努力する力」、「問題・課題を自ら解決する力」、「自分の意見や考えを話し伝える力」に基づき、各教科において教科の目標と育成を目指す資質・能力を設定した。
- ② 観点別学習状況の評価の実施のため、全ての教科においてシラバス（年間指導計画）に重点化する学習内容と観点別の学習状況の評価方法を記載した。
- ③ 単元（学習内容のまとまり）ごとに単元テストを実施し、観点別の評価の生徒へのフィードバックを行った。
- ④ 令和3年11月8日（月）に「『学びの重点化』推進プロジェクト研究協議会」を開催した。公開授業及び研究協議に町内の小中学校及び管内の高等学校から25名が参加し、多くの助言を得ることができた。



研究協議会の様子

イ 重点教科での取組

<数学科>

取組内容

教科の目標である「筋道の通った考え方ができるようになる」や教科における育成を目指す資質・能力に基づく思考力、判断力、表現力に重点を置いた授業づくり

- ・定期考査や単元テストにおいて、思考力、判断力、表現力を問う問題の実施

【思考力、判断力、表現力を問う問題の例】

○ 数式の問題において誤答から正答に導く論理を説明する問題

- ・次の問いに対する太郎君の解答は誤っている。何が誤っているのか説明し、正しい答えを導きなさい。

問 $y=2(x-2)^2-5$ ($-1 \leq x \leq 3$)における、最大値と最小値を求めよ。

太郎君の解答 与式より $y=2(x-2)^2-5$ に $x=-1$ を代入すると、 $y=13$ である。

$x=3$ を代入すると、 $y=-3$ となる。

よって、最大値 13 ($x=-1$)

最小値 -3 ($x=3$)

- ・各単元において取り扱う内容に軽重を付けるとともに、重点化する内容を明確にするなどの授業展開の工夫
- ・習熟度別展開授業における評価規準や評価方法について、シラバスに明文化し担当教員間や生徒で共有するなどの学習評価の工夫

取組成果

授業展開の工夫や、定期考査における誤答訂正問題や説明問題などの工夫により、生徒は数学的な概念や原理・法則を体系的に理解し、事象の本質を考察しようする意欲を高めることができた。

○ 道教委「学習状況等調査」（数学）の結果

項 目	R 元年度	R 2 年度
「問題が解けたとき、もっと簡単に解く方法がないか考える」という質問に対し「そう思う」と回答した生徒の割合	7.3%	11.4%
「公式等を学習したとき、その根拠や証拠を理解しようとしている」という質問に対し「そう思う」と回答した生徒の割合	14.6%	17.1%

<英語科>

取組内容

思考力、判断力、表現力等を育成するために、自らの考えを英語で表現し、「話すこと」、「書くこと」に重点を置いた学習指導の充実

- ・4技能を効果的に配置したハンドアウトの作成と、情報のアウトプットに重点をおいた学習指導の実践
- ・授業で学習した内容を定期的に課題として提示するなど、授業と家庭学習を組み合わせた効果的な学習指導の実践
- ・「話すこと」及び「書くこと」に関わる言語活動と評価の充実

パフォーマンステストの実施状況		
1 学年（5 回）	インタビューテスト	英検 2 次試験を参考にした面接テスト
1 学年（5 回）	ライティングテスト	教科書のトピックに基づく英作文テスト
2 学年（5 回）	インタビューテスト	英検 2 次試験を参考にした面接テスト
2 学年（5 回）	ライティングテスト	教科書のトピックに基づく英作文テスト

取組成果

情報のアウトプットや、授業と家庭学習を組み合わせた学習指導などにより、外部試験に挑戦するなど生徒の英語に対する関心を高めることができた。

○ 道教委「英語教育実施状況調査」の結果		
項 目	R 2 年度	R 3 年度
外部試験を受験した生徒数	10 名	12 名
CEFR A2 レベル相当以上を取得している生徒数（同等の英語力を有すると思われる生徒を含む）	0 名	4 名

<理科>

取組内容

学校でしかできない体験的で協働的な学習活動に重点をおいた授業づくり

- ・グループワークや実験・観察を中心とした学習活動を継続的に展開するなど、思考力、判断力、表現力を伸ばす授業づくり
- ・実験・観察の振り返りシートの活用や、「原子」、「分子」などの概念ラベルをコンセプトマップにまとめる活動を行うとともに、観点別学習状況の評価による指導と評価の一体化
- ・Google classroom において基本事項の確認テストを週 1 回程度配信することにより、生徒間で学んだ内容を共有する機会を設けるなど、基礎力を定着させるための ICT の活用

取組成果

実験・観察の継続的な実施と、振り返りシートやコンセプトマップの活用などにより、生徒の基礎的・基本的な内容の理解を深めることができた。

○ コンセプトマップ作成後の生徒の主な感想
・自分の知識量が増えたことにより、次の学習につなげることができるようになった。
・学習前に比べ、学習後の方がコンセプトマップも広がっていき、理解が深まった。
・コンセプトマップの作成により、一つ一つの概念に対して理解を深めることができた。

<家庭科>

取組内容

高校生の目線で地域のヒト・モノ・コトをつなぎ、新たな価値を見出す上士幌高校発の企画「上高マッチング」の実施

- ・道の駅の新商品開発などを通して、より多くの発想を大切にしてアイデアを形にするなど、思考力、判断力、表現力に重点をおいた授業づくり
- ・地域人材との協働活動や地元町民への成果発表など、よりよい人間関係を築く力を高める活動
- ・「ほっと」を活用して生徒のコミュニケーションスキルを適宜測定し、測定結果を個々の生徒にフィードバックする取組

取組成果

「ほっと」において「関係維持」や「仲間強化」の数値が上昇するなど、協働的な学習に取

り組んだことにより、生徒が社会人となるために必要な基礎力の養成を図ることができた。

○ 「ほっと」の測定結果（3学年「ライフデザイン」を受講した生徒）			
項 目		1 回目	2 回目
R 2 年度（13 名）	関係維持（よい関係を保つ力）	48.7	52.2
	仲間強化（仲間と高め合う力）	47.7	48.6
R 3 年度（15 名）	関係維持（よい関係を保つ力）	49.5	56.1
	仲間強化（仲間と高め合う力）	49.5	57.8

ウ 全体としての成果

- ① カリキュラム・マネジメントを踏まえ、学校として育成を目指す資質・能力を各教科・科目に落とし込んで指導計画を作成したことにより、系統的な指導の実施に繋げることができた。
- ② 各教科・科目の年間指導計画に学習内容の重点を示すとともに、観点別学習状況の評価を計画的に実施したことにより、組織的に授業改善に取り組むことができた。
- ③ 授業展開の工夫や、単元テストの定期的な実施などにより、生徒の家庭学習の習慣化や基礎学力の定着に一定の成果が見られた。

○ 道教委「学習状況等調査」の結果		
項 目	R 元年度	R 2 年度
「授業がある平均 1 日あたりの学習時間」について「1 時間以上 2 時間未満」と回答した生徒の割合	14.6%	17.1%
「休日 1 日あたりの学習時間」について「1 時間以上 2 時間未満」と回答した生徒の割合	14.6%	20.0%

- ④ 思考力、判断力、表現力に重点を置いた授業づくりに取り組んだことにより、生徒の教科・科目への興味・関心や学習意欲を高めることができた。

- 生徒による授業評価アンケートにおける主な感想
- ・周りの生徒と意見を交流する機会が増えたので、自分とは違った考え方を知ることができた。
 - ・グループ内で話し合いながら学習を進めることができたので、やる気が高まった。
 - ・全体で発表する場面は、どうすれば自分の意見が他者に伝わるかについて考えるよい機会となった。

4 今後の課題と対応

本研究指定の期間だけに留まらず、今後も継続して「学びの重点化」を踏まえた授業改善に取り組むことで、基礎的・基本的な内容の定着と思考力、判断力、表現力の育成を図る必要がある。そのため、全教科で足並みを揃えた計画的な単元テストの実施や、定期的な授業評価アンケートの実施・分析などの取組を組織的に進めていく。

5 問合せ先

学 校 名：北海道上士幌高等学校
 所 在 地：北海道河東郡上士幌町字上士幌東 1 線227番地
 電話番号：0 1 5 6 4－2－2 5 4 9
 FAX番号：0 1 5 6 4－2－2 5 4 9
 e-mail：kamiko-jm@hokkaido-c.ed.jp

北海道高等学校
「未来を切り拓く資質・能力を育む高校教育推進事業」
実施要綱

(令和元年(2019年)7月12日高校教育課長決定)
(令和2年(2020年)7月1日一部改正)
(令和3年(2021年)6月4日一部改正)

1 趣旨

新学習指導要領の実施に向け、生徒が未来社会を切り拓くための資質・能力を育成するため、生徒に求められる資質・能力とは何かを社会と共有し連携する「社会に開かれた教育課程」の実現を図る。

2 事業の目的

- (1) カリキュラム・マネジメントの確立
- (2) 思考力、判断力、表現力等の育成
- (3) 主体的・対話的で深い学びの実現

3 事業の実施期間

令和元年度(2019年度)から令和3年度(2021年度)までの3年間とする。

4 事業の内容

(1) 学校支援事業

ア 総合的な探究の時間推進プロジェクト

(7) モデル校事業

①目的

高等学校における「総合的な探究の時間」の推進を図るため、ICTを効果的に活用した探究活動の実践研究に取り組み、その成果の普及を図る。

②指定校

選抜性の高い大学への進学実現を目指す生徒が多い道立高等学校等のうち1校を指定校として、道教委が指定する。

③指定期間

令和元年度(2019年度)から令和3年度(2021年度)までの3年間とする。

④ICT環境の整備

道教委は指定校に対し、予算の範囲内でICT環境を整備する。ただし、整備等の期間は指定期間内とする。

⑤研究内容

- ・大学や社会との円滑な接続を図るための先進的な探究学習に係る実践研究
- ・探究活動において、ICTを効果的に活用するための実践研究
- ・教科等横断的な取組を推進するための校内体制の構築

⑥実践研究の計画書及び報告書等

・計画書

指定校は、毎年度3月末までに計画書(様式1)を作成し、教育局を経由の上、高校教育課長に提出するものとする。

(初年度は、指定の決定から2週間以内)

・報告書

指定校は、毎年度2月末までに報告書(様式2)を作成し、教育局を経由の上、高校教育課長に提出するものとする。

⑦その他

- ・高校教育課は、指定校における地域課題の解決に関する探究的な学習活動を支援するため、必要に応じて指定校がIT企業や大学等からの支援を受けることができるよう努めるものとする。
- ・事業の実施に必要な事項は、高校教育課長が別に定める。

(イ) プロジェクト研究事業

①目的

本道高等学校における「総合的な探究の時間」の充実を図るため、北海道立教育研究所の「道研プロジェクト研究」の指導事例等を活用した実践研究に取り組み、その成果の普及を図る。

②指定校

道立高等学校等から5校程度を指定校として、道教委が指定する。

③指定期間

令和元年度（2019年度）から令和3年度（2021年度）までの3年間とする。

④研究内容

道立教育研究所研究研修主事が支援する。

- ・校内体制の構築
- ・育成すべき資質・能力に応じた取組の充実を図るための実践研究
- ・「道研プロジェクト研究」の指導事例等の活用した取組方法の検証

⑤指定の選定

「5 指定の手続き」による。

⑥その他

- ・高校教育課は、指定校における地域課題の解決に関する探究的な学習活動を支援するため、必要に応じて指定校がIT企業や大学等からの支援を受けることができるよう努めるものとする。
- ・事業の実施に必要な事項は、高校教育課長が別に定める。

イ カリキュラム・マネジメント推進プロジェクト

(7) SCRUM事業の発展・継続（「北海道高等学校「学びの重点化」推進プロジェクト」）

①目的

「教科等の本質的な学びを踏まえた主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の視点からの学習・指導方法の改善の推進のための実践研究（SCRUM）」事業（以下「SCRUM」という。）の成果を踏まえ、研究協議や校内研修等を通じて、「学びの重点化」による効果的な学習指導の開発に取り組み、全道的な主体的・対話的で深い学びの実現を図る。

②事業内容

- ・道内を4圏域に分け、圏域ごとに本事業の研究指定校（推進校及び協力校各1校）を指定する。
- ・研究指定校においては、国語、数学、地理歴史、公民、理科、外国語（英語）における実践のほか、各校の状況に応じて、他の教科等を加えて、本事業の趣旨を踏まえた研究を行う。
- ・各圏域ごとに、本研究に係る実践発表及び研究協議を毎年度開催する。
- ・指定校の優れた授業実践を集約し、北海道教育委員会のホームページに掲載するなどして、全道の公立高等学校へ研究成果等を普及する。

③実施期間

令和2年度（2020年度）から令和3年度（2021年度）までの2年間とする。

④その他

事業の実施に必要な事項は、高校教育課長が別に定める。

(イ) 教員研修会

①目的

教育課程研究協議会における研究協議等の成果を踏まえ、教科等横断的な視点による教育課程編成・実施についての理解を深め、教務主任の立場から自校のカリキュラム・マネジメントに関する課題解決の方策を考える。

②事業内容

- ・自校の課題を洗い出しや課題解決を図り、カリキュラム・マネジメントを確立するための演習を中心とした「カリキュラム・マネジメント推進会議」を実施
- ・前年度の教育課程研究協議会の事前課題を踏まえた講義・演習

- ③実施
- ・開催時期
8月～9月のうち1日間
 - ・開催場所
各管内の総合振興局又は振興局
- ④参加対象
教務主任又は、前年度に教育課程研究協議会に参加した教員、教務を担当する教員
- ⑤講師及び運営等
北海道立教育研究所研究研修主事等が行う。
- ⑥その他
事業の実施に必要な事項は、高校教育課長が別に定める。
- (2) 教員支援事業
- ア 授業改善セミナー
- (7) 目的
教員の教科指導力の向上及び主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、授業改善の取組を推進するため、優れた教科指導力を有する教員等を講師として、授業改善セミナーを開催する。
- (4) 授業改善セミナーの開催
- ①教科指導講座
- 開催趣旨及び教科等
主体的・対話的で深い学びの実現に向けた学習・指導方法等、効果的な指導方法にかかわるワークショップや研究協議など、教員の教科指導力の向上を図る実践的な研修を行う。原則として、参加を希望する次の各ブロックの教員等を対象とし、国語、地理歴史・公民、数学、理科、英語及び情報について、毎年度開催する。
- | ブロック名 | ブロックを構成する教育局名 |
|--------|----------------------------|
| 道央ブロック | 石狩教育局、後志教育局、空知教育局 |
| 道南ブロック | 渡島教育局、檜山教育局、胆振教育局、日高教育局 |
| 道北ブロック | 上川教育局、留萌教育局、宗谷教育局 |
| 道東ブロック | 十勝教育局、オホーツク教育局、釧路教育局、根室教育局 |
- 講師及び運営等
- ・教科指導講座の講師は、道教委が各ブロック内の高等学校の優れた教科指導力を有する教員（以下「教科指導スペシャリスト」という。）から選出する。
 - ・教科指導スペシャリストの連絡調整等は、当該教科を担当するブロック内の指導主事（以下「担当指導主事」という。）が行う。
 - ・教科指導講座は、教科ごとに、担当指導主事が教科指導スペシャリストと連携し、企画・運営する。
 - ・教科指導スペシャリストは、高校教育課において決定後、高校教育課長から委嘱する。
- ②進学指導講座
- 開催趣旨及び教科等
大学進学を目指す生徒を指導するために、特に必要な授業力を高める研修を行う。参加を希望する全道の教員等を対象とし、国語、数学及び英語について、各教科2会場毎年度開催する。
- 講師及び運営等
- ・進学指導講座の講師は、道教委が全道の高等学校の優れた教科及び進学指導力を有する教員（以下「進学指導スペシャリスト」という。）から選出する。
 - ・進学指導スペシャリストの連絡調整等は、当該教科を担当する教育局等の高等学校教育指導班（以下「担当指導主事」という。）が行う。
 - ・進学指導講座は、教科ごとに、担当指導主事が進学指導スペシャリストと連携し、企画・運営する。

- ・進学指導スペシャリストは、高校教育課において決定後、高校教育課長から委嘱する。

(ウ) その他

- ・高校教育課は授業改善セミナーの実施に当たり、必要に応じて道立高校教諭、指導主事・研究研修主事及び大学教授等からなる授業改善検討チームを設置し、教科指導スペシャリスト及び進学指導スペシャリストの支援に努めるものとする。
- ・事業の実施に必要な事項は、高校教育課長が別に定める。

イ アドバンスト学習キャンプの講師育成講座

(7) 目的

アドバンスト学習キャンプの講師となる教員を対象に、選抜性の高い大学への進学を目指す生徒に対して行う、探究的な要素や効果的な指導法を取り入れた英語・数学・国語の講義の実施に資する資質・能力を身に付けさせるために開催する。

(イ) アドバンスト学習キャンプの講師育成講座の開催

高校教育課が主催して、大学教授等の有識者を講師とした講演や、学習指導要領等の説明やアドバンスト学習キャンプにおける指導方法の説明、ワークショップによる交流などを通して、アドバンスト学習キャンプの講師としての資質・能力の育成に資する内容として開催する。

(ウ) 実施

①開催時期

8月～9月のうち1日間

②開催場所

北海道立教育研究所

③参加対象

アドバンスト学習キャンプの講師とする。

④旅費等

道費で措置する。

⑤その他

ウ 理数探究セミナー

(7) 目的

新学習指導要領の実施に向け、新設された理数探究基礎及び理数探究について教員の理解を深めるとともに、科目の開設に向けた検討を円滑に実施できるよう支援するために開催する。

(イ) 理数探究セミナーの開催

○開催趣旨及び教科等

理科及び数学の教員を対象に、課題研究の指導を行っている学校の事例を踏まえ、体験的な要素を含む実践的な講座を実施することで教員の理解を深め、科目の開設に向けた検討を円滑に実施できるよう支援する。

○講師及び運営等

- ・理数探究セミナーの講師は、理科及び数学の指導主事、研究研修主事等、課題研究の指導を実施している道立高等学校の教員等とする。
- ・理数探究セミナーの実施に係る連絡調整等は、高校教育課で行う。
- ・理数探究セミナーの運営は北海道立教育研究所の職員及び附属理科教育センターの職員が行う。

(ウ) 実施

①開催時期

9月～12月のうち3日間（3回実施）

②実施形態

原則、オンラインで実施する。

③参加対象

原則、道立高等学校の理科及び数学の教諭

※内容の系統性から、原則、3日間（3回）参加できる者

④その他

事業の実施に必要な事項は、高校教育課長が別に定める。

エ 「学びの重点化」推進プロジェクトの成果の普及・啓発

北海道高等学校教育課程研究協議会や授業改善セミナー等において、「北海道高等学校「学びの重点化」推進プロジェクト」における指定校の取組や成果等を活用する。

(3) 生徒支援事業

ア 次世代人材育成プロジェクト

(7) 探究活動キャンプ

①目的

積極的に自ら課題を発見し、その解決を目指して他者と協働しながら、学習成果を様々な形で表現していく活動に意欲的に取り組むことができる生徒を対象とし、これからの時代に必要な情報活用能力や課題解決能力、表現力、コミュニケーション能力等を育み、次世代のリーダーの育成を図るとともに、進路実現に向けた学力の向上と進学意欲の高揚を図る。

②事業内容

道内大学等と連携し、大学進学への理解を深める各種講演や探究学習による交流などを通して、リーダーシップ育成及び学力の向上、大学への進学意欲の高揚に資する内容として開催する。

③実施

・開催時期

8月（夏季休業中）、1月（冬季休業中）及び3月

・開催場所

札幌市内等（オンライン開催を含む）

④参加対象

公立高校及び公立中等教育学校の生徒とする。

（生徒会などのグループ単位での参加も可）

⑤参加費用

別途定める。

⑥講師及び運営等

大学等の有識者及び道教委指導主事等が行う。

⑦その他

・高校教育課は、参加校における地域課題の解決に関する探究的な学習活動を支援するため、必要に応じて指定校がIT企業や大学等からの支援を受けることができるよう努めるものとする。

・募集人数など開催に必要な事項は、高校教育課長が別に定める。

(4) アドバンスト学習キャンプ

①目的

選抜性の高い大学（北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学、医育大学など）への進学を目指す道内の生徒を対象に進路実現に向けた学力の向上と進学意欲の高揚を図る。

②内容

大学進学や効果的な学習方法の理解を深めるため、進学指導に優れた教員等による講義、生徒間の学習の交流など、リーダーシップの育成及び学力の向上、大学への進学意欲の高揚に資する内容とした講演等を開催する。

③開催期間

年度内、連続又は各日の計2日間とする。

④開催場所

道内4か所程度、道立高等学校等とする。

⑤参加対象

選抜性の高い大学への進学を目指す道立高校及び中等教育学校の生徒とする。

⑥講師及び運営等

道立高等学校において教科指導力に優れた教員及び会場となる道立高校を所管する教育局等が行う。

⑦指定の選定

「５ 指定の手続き」による。

⑧その他

開催に必要な事項は、高校教育課長が別に定める。

(4) 基礎診断プロジェクト

高校教育の質の確保・向上の観点から、基礎学力の定着や学習意欲の喚起を促す P D C A サイクルの構築・確立に向けた取組の推進を図る。

ア 学力テスト設定モデル

設定モデル名	対 象 と 目 的
コアアビリティモデル (Cモデル)	選抜性のある大学への進学を希望する生徒を除く全ての生徒を対象に、これからの時代に求められる資質・能力のうち、教科に関わる基礎的基本的な学力（コアアビリティ）を身に付けさせる。
ベーシックモデル (Bモデル)	選抜性のある大学（「大学入試センター試験」あるいは「大学入学共通テスト」を課す大学）への進学を希望する生徒を対象に、当該大学への進学に必要とされる学力を身に付けさせる。
アドバンスモデル (Aモデル)	選抜性の高い大学（北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学、医歯大学など）への進学を希望する生徒を対象に、当該大学への進学に必要とされる学力を身に付けさせる。

イ 学力テストを作成する教科

- ・国語、数学、英語の３教科とし、それぞれ３モデルを作成する。
- ・「高校生の学びの基礎診断」の測定ツールとして活用できるよう作成する。

ウ 学力テスト開発委員会

設定モデルにおいて担当する教科の学力テストの問題や分析マニュアルの内容や活用方法について、実践研究を行う。

(7) 学力テスト開発委員は、高校教育課長が委嘱する。

(イ) 学力テスト開発委員は、各教科・モデルに担当指導主事・研究研修主事１名のほか、教諭を３名を当てる。

(ロ) 学力テスト開発委員は、思考力・判断力・表現力等を評価するための問題作成に積極的に取り組みたい教員を公募する。なお、所定の人数を満たさない場合は、道教委が選任する。

(ハ) 担当する教科（国語、数学、英語）の学力テストを作成・改善する。

(ニ) 担当する教科（国語、数学、英語）の分析マニュアルを作成・改善する。

(ホ) 学力テスト開発委員会に参加する。

(ヘ) 会議の実施に必要な事項は、高校教育課長が別に定める。

5 指定の手続

(1) 4 (1) ア (イ) の「プロジェクト研究事業」の指定を希望する道立高等学校等は、希望調書（様式３）を作成し、所定の期日までに、教育局を經由し、高校教育課長に提出するものとする。なお、希望調書（様式３）は計画書を兼ねるものとする。

(2) 指定校の指定

高校教育課長は、希望調書の内容に基づき、指定校を指定する。

(3) 指定の通知等

高校教育課長は、(2)により指定校の指定を行った際には、関係の教育局長に対して通知する。

6 実践研究の報告書

4 (1) ア (イ) の「プロジェクト研究事業」の指定校は、報告書（様式４）を作成し、指定年度の２月末までに、教育局を經由の上、高校教育課長に提出するものとする。

7 実践研究に対する指導・助言

本庁及び教育局等は、推進校等における実践研究等が円滑に行われるよう、必要な指導・助言を行うものとする。

8 その他

この要綱で定めるもののほか、本事業の推進に必要な事項については、高校教育課長が別に定める。

附 則

この要綱は、決定の日から施行する。

附 則

この要綱の一部改正は、決定の日（令和2年（2020年）7月1日）から施行する。

附 則

この要綱の一部改正は、決定の日（令和3年（2021年）6月4日）から施行する。

北海道高等学校「未来を切り拓く資質・能力を育む高校教育推進事業」 (R1～R3)

生徒支援事業

◎思考力・判断力・表現力等の育成

教員支援事業

◎主体的・対話的で深い学びの実現

学校支援事業

◎カリキュラム・マネジメントの確立

新しい時代に必要な資質・能力を育成するための 本事業のデザイン

思考力、判断力、表現力等の育成

次世代人材育成プロジェクト

基礎診断プロジェクト

○学カテストの作成
「高校生のための学びの基礎
診断」の測定ツールとして活用

○分析マニュアルの作成
基礎診断及び道教委学力テス
トの分析マニュアルの作成

○基礎診断等の活用
基礎診断及び道教委学力テス
トの分析結果に基づく授業改善
の推進

アドバンスト学習キャンプ

青少年体験活動支援施設に
おける国数英の学習合宿

思考力、判断力、表現力等の育成

次世代人材育成プロジェクト

基礎診断プロジェクト

○学カテストの作成
「高校生のための学びの基礎
診断」の測定ツールとして活用

○分析マニュアルの作成
基礎診断及び道教委学力テス
トの分析マニュアルの作成

○基礎診断等の活用
基礎診断及び道教委学力テス
トの分析結果に基づく授業改善
の推進

アドバンスト学習キャンプ

青少年体験活動支援施設に
おける国数英の学習合宿

主体的・対話的で深い学びの実現

主体的・対話的で深い学びプロジェクト

○授業改善セミナー
教科指導講座、進
学指導講座の実施

○スペシャル養成講座
各種研究会やアドバン
スト学習キャンプ等におけ
る講師の育成

OSCRUM
事業との
連携

総合的な探究の時間推進プロジェクト

○モデル校専業
1校を指定し、高等学校
における「総合的な探究
の時間」の推進を図るた
め、効果的にICTを活用
した探究活動の実践研
究

○プロジェクト研究専業
5校程度を指定し、北海
道立教育研究の「道研
プロジェクト研究」の指
導事例を活用した実践
研究

カリキュラム・マネジメント推進プロジェクト

○教育課程研
究協議会
カリキュラム・
マネジメントの
確立に係る研
究協議を実施

○教員研修会
北海道教育研究所
から講師を派遣し、
教育課程研究協議
会のフォローアップ
研修を実施

SCRUM
事業との
連携

新学習指導要領との関連

◎育成を目指す資質・能力の明確化

- ・学習の基盤となる資質・能力
- ・現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力
- ・高校教育を通じて身に付けるべき資質・能力「コア」として示された力
- ・学力について、高大接続改革で重視する学力の3要素を踏まえ、「基礎的な知識および技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「主体的に学習に取り組む態度」、「多様性・協働性の重視」

◎主体的・対話的で深い学びの実現に向けた体制づくり

- ・学校全体で組織的に取り組むことが重要
- ・SCRUM事業の成果を参考にした取組
- ・学習指導と関連付けた生徒指導の充実
- ・障がいのある生徒の実態に応じた指導方法の工夫
- ・高大接続やキャリア教育の視点で学校と社会の接続

◎教科の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていく

- ・教科等横断的な視点に立った教育課程の編成
- ・見える化を図るための「単元配列表」の作成（「総合的な探究の時間」を軸に示すなど）